

日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書 1 5 6

中世文学における婦人の名誉

嶋崎 啓 編

一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 156

Die Ehre der Frau in der mittelalterlichen Literatur

Herausgegeben
von
Satoru SHIMAZAKI

JGG Tokyo

本叢書は、春季・秋季研究発表会におけるシンポジウムの記録のため、日本独文学会が（2017年以降は学会ホームページにおいて）発表の場を提供しているものです。叢書の編集は、学会編集委員等による査読制をとらず、各編集責任者に完全に任されています。

Mit der Studienreihe (SrJGG) bietet die Japanische Gesellschaft für Germanistik den einzelnen Veranstaltern der Symposien in den Frühlings- und Herbsttagungen die Möglichkeit, die Beiträge und die Diskussionsinhalte der Symposien zu dokumentieren und (seit 2017 im Internet) zu publizieren. Die Artikel sind nicht von der JGG-Redaktion peer reviewed, sondern werden ausschließlich vom jeweiligen Herausgeber wissenschaftlich-redaktionell zusammengestellt.

目次

まえがき	1
中高ドイツ語の <i>êre</i> 「名誉」 の語義について	嶋崎 啓 3
『パルチヴァール』における女性の「名誉」	松原 文 12
ミネザングにおける婦人の名誉 —「婦人の歌」を中心に.....	伊藤 亮平 27
イゾルデの名誉と愛 —トリスタンの刀の欠損部分の意味と媚薬の役割	渡邊 徳明 38
あとがき	54

Inhalt

Vorwort	1
Satoru SHIMAZAKI: Über die Bedeutung des mittelhochdeutschen Wortes „êre“	3
Aya MATSUBARA: Zum Begriff der Ehre in <i>Parzival</i> Wolframs von Eschenbach	12
Ryohei ITO: Die Ehre der Frauen im Minnesang – Mit dem Schwerpunkt auf den Frauenliedern	27
Noriaki WATANABE: Isoldes Ehre und Liebe – Die Rollen vom Schwertsplitter und dem Minnetrank	38
Nachwort	54

まえがき

クレメンス・ブレンターノの小説『勇敢なカスパールと美しいアンナールの物語』においてカスパールは「名誉」Ehreのために死ぬ。カスパールは軍人であり、軍人としての「名誉」が損なわれたことが死の原因となる。中世の騎士文学で問題になる「名誉」*ère*も、騎士がそれを守るために死を賭して戦うというところを見れば、カスパールが重んじた「名誉」と似ていると言えるかもしれない。しかし、カスパールは自分の父と義理の兄が盗賊であったことを恥と思い、それが「名誉」を損なうと考えて自殺する。それに対し、中世の騎士が自分の親族が強盗であることを恥とって自殺することは考えにくい。

「名誉」は社会情勢によって意味内容が変わる。中世文学における「名誉」は中世という時代の、文学における「名誉」である。ここには、時代のみならず文学の中でという限定が付けられている。実際、「名誉」が文学で重要な意味を持つためには、社会がそれを重んじることに加えて、それが表現に値するものとして特別な意義を帯びていなければならない。現代のドイツにおいては、そもそも社会が名誉を何よりも重要なものとして尊重してはいないので（個人でそう思う人はいるであろうが）、文学の題材になることは少ない。しかし、一昔前の名誉がかなり重視された社会においても、文学が名誉を問題とすることは多くなかった。それはおそらく、名誉が作家にとって表現するに足る問題性や魅力を持たなかったためであろう。（ブレンターノが「名誉」を題材としたのは、名誉を重視することへの批判的まなざしを彼が持っており、「名誉」は彼にとって描くべき何かであったためだと思われる。）それに対し、中世の宮廷文化において名誉は騎士がつねに意識し、目指さねばならない行動の指針となるものであり、詩人が騎士を描く場合には避けては通れない課題であった。

「名誉」がそのように騎士の問題であるとき、「婦人の」名誉がどうなるのかが問われる。誰が婦人の名誉を規定し、その名誉のために婦人は何を求められたのか。基本的に名誉はあらゆる時代と社会を通じて男性的なものである。「婦人の名誉」は、男の、男による、男のための名誉にほかならない。しかし、すぐれた文学はつねに社会の一步先を予見するものである。作者たちはその時々社会と人間を見つめることで、その時代にはまだ名付けられていない問題をすくい取り、先んじて表現する。樋口一葉の『十三夜』は夫による妻に対するモラルハラスメントを描き、フロベールの『ボヴァリー夫人』は買い物依存症を扱う。「モラルハラスメント」や「買い物依存症」という言葉が作られる前に、彼らは人間を、あるいは自分自身を観察することによって、後の時代に問題になることを描くことができた。そういう意味で、「婦人の名誉」が、女が望むのではなく男から要求されるものであったとしても、文学に描かれた「婦人の名誉」は単に男からの要求という部分を超えた何かを含むことが期待される。

こうした問題意識のもと、2023年の秋季研究発表会におけるシンポジウムの成果として、本論集は、中世文学における「婦人の名誉」を叙事詩および抒情詩において考察した。

まず嶋崎論文は全体の議論の前提として、中高ドイツ語の *êre*「名誉」の語義を確認する。ここでは語源や類語の一般的な説明のあとで、「能動的な騎士の名誉」と「受動的な婦人の名誉」の対比や「外面的な名誉」と「内面的な名誉」の対比が提示される。その上で、そうした図式的な対比を突破する可能性についても言及される。

次に、松原論文はヴォルフラム・フォン・エシェンバッハ『パルチヴァール』に現れる女性たちの名誉を論じる。シグーネ、アンチコニーエ、オルゲルーゼという三者の名誉を分析し、典型的な受動的婦人の名誉を表すシグーネと、そこからの逸脱を表すアンチコニーエとオルゲルーゼを論じる。

伊藤論文はミンネザングの、中でも特に「婦人の歌」に現れる名誉を考察する。基本的に婦人の名誉は貞節を守ることであり、ミンネザングにおいては愛の成就が不名誉につながる。一方、騎士にとっては愛の成就が名誉となるので、騎士と婦人は対立することになる。しかし、騎士にとっての真の名誉は、かなえられない愛を放棄せずに貫くことである。ここで騎士の名誉と婦人の名誉は合致し、男女の差異が乗り越えられることが明らかになる。

最後に渡邊論文はゴットフリート・フォン・シュトラースブルク『トリスタン』におけるイゾルデにとって名誉を追究する。ここでは、宮廷的作法のコード、宮廷社会の序列をめぐるコード、内面的な愛のコードという三つのコードにもとづいて、それぞれのコードにおいて何がイゾルデの「名誉」となり、何がその「名誉」を傷つけるかが論じられる。宮廷的作法のコード、宮廷社会の序列をめぐるコードという二つのコードは、他者との関係によって規定される「外面的な」名誉を規定するのに対し、三つ目の内面的な愛のコードにおいては、他者からの評価が度外視されるので、そこで問題になる「名誉」は主観的であるとともに、非典型的な「名誉」でありながら、より純粋な「名誉」ということにもなりうることが示される。

以上の論考を通して、最終的に、中世文学における「婦人の名誉」が単に男から要求されるものだけではなく、婦人の側から積極的に求めるものを含んでいたことが透けて見えるであろう。

なお、本論集は JSPS 科研費 JP21K00424 (基盤研究 (C))「中世後期ドイツ宮廷文学の遊戯性の諸相—恋愛文学のパロディー化における作者性」(研究代表者: 渡邊徳明) の共同研究の成果の一部であり、ここに感謝を申し上げる。

嶋崎啓

中高ドイツ語の *êre* 「名誉」の語義について

嶋崎 啓

本論は、中世ドイツ文学における「婦人の名誉」を扱う際に前提となる、中高ドイツ語の名誉 *êre* の語義を明確化することを目的とする。最初に婦人の名誉に限定されない「名誉」一般の意味を概観し、その上で「婦人の名誉」において何が問題になりうるのかを考察したい。

1. *êre* の辞書的意味

まず中高ドイツ語の *êre* (> *Ehre*) の語源について述べると、Kluge (2011) は *êre* の語源として ‘*Achtung*’ 「敬意」を意味するゲルマン語の **aizō* を挙げる。同じ語源に基づく語としては、古ノルド語の *eir* ‘*Gnade, Milde, Hilfe*’ 「恵み、寛大、援助」や古英語の *ær* ‘*Wohltat, Schonung, Ehre*’ 「善行、いたわり、名誉」、古フリース語の *êre* などがあると言う。基本的にこれらの語はすべて他者を大事にし、重んじるという意味を持つことが分かる。

次に三つの中高ドイツ語の辞典（伊東他：2001、Benecke et al.: 1990、Lexer: 1992）における *êre* の語義を挙げる。

- ①（騎士が騎士としてよって立つ身分、高い地位、権力、富、勇敢さを世の人から承認・尊敬・称賛されて与えられる）誉れ、評判、名声、名誉、*êre* に伴う権利（所有地の収益など）。②（他人に示す）尊敬、敬意；敬意・服従を表明するもの。③名誉・対面を重んじる心、名誉ある立派な態度；礼儀、儀礼。（伊東泰治他『中高ドイツ語小辞典』）

1. 尊敬を受けること (*Verehrtheit*)、名声 (*Ansehen*)、富や高い地位や勇敢さや志操がこちらにもたらす評判 (*Ruhm*)。2. こちらから誰かに示す栄誉 (*Ehre*)。ある個人に付与される価値の承認の外的な標識。3. 美德 (*Tugend*) としての名誉 (*Ehre*)、名誉を重んじる感覚 (*Gefühl*)、立派な (*ehrenhaft*) 振る舞い。4. 擬人化された *Êre*。
(Benecke/Müller/Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*)

能動的に、尊敬すること (Ehrebietung)、尊敬 (Verehrung)。称賛 (Preis)、誉れ (Zierde)。受動的に、尊敬を受けること (Verehrtheit)、名声 (Ansehen)、評判 (Ruhm)。勝利 (Sieg)。支配 (Herrschaft)、領主的権力 (fürstliche Macht)、支配者の力 (Gewalt des Gebieters)。美德 (Tugend) としての名誉 (Ehre)、名誉を重んじる感覚 (Ehrgefühl)、立派な (ehrenhaft) 振る舞い。擬人化。(Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch)

上のどの辞書も、*êre* が「他者に賞賛されること」、「他者を賞賛すること」、「他者に賞賛されるようなすぐれた態度、行為」といった意味を持つことを示す。すなわち、①受動的に他者から受ける「名誉」、②能動的に他者に与える「名誉」、そして③理念として行動の目的となる「名誉」である。③の理念としての「名誉」は、他者に賞賛される名誉であるため、①の受動的な「名誉」でもある。ただし、「名誉」は結果として受けるのではなく目的として目指すものであるため、その点では①の「名誉」と同じではない。

次に「名誉」に関わる *êre* の類語である中高ドイツ語の *prîs*, *lop*, *werde*, *werdecheit* の辞書の語義を挙げる。

prîs:

称賛、栄誉、名声；立派な行為。(伊東他)

ラテン語 *pretium* 「価値、価格、賃金、報酬、代償」, 仏語 *prix*, 英語 *prize* および *price* より。外来起源のため語の使用に揺れがある。他者の判断におけるより高い価値づけ (*Geltung*)。卓越性の公的な承認。価値あるもの。(Benecke/Müller/Zarncke) 称賛 (*Lob*)、評判 (*Ruhm*)、価値 (*Wert*)、称賛 (*Preis*)。栄華 (*Herrlichkeit*)。価値あるもの。価値ある性質、行為一般。(Lexer)

lop/lob:

称賛、賛美。(伊東他)

称賛 (*Lob*)、称賛 (*Preis*)。(Benecke/Müller/Zarncke)

称賛 (*Lob*)、称賛 (*Preis*)、褒め称えること (*Lobpreisung*) 一般。(Lexer)

werde/wirde

栄誉、名声；敬意、尊敬。(伊東他)

名声 (*Ansehen*)、威厳 (*Würde*)。(Benecke/Müller/Zarncke)

価値、価値ある性質、名声、威厳、名誉 (*Ehre*)、敬意の表明 (*Ehrenbezeugung*)、尊敬 (*Verehrung*) 一般。(Lexer)

werdecheit/wirdecheit/werdekeit/wirdekeit

敬意、賞賛；榮譽、品位。(伊東他)

人が置かれた高い名声、名誉 (Ehre)、栄華 (Herrlichkeit)；名声や名誉を与えるもの。(Benecke/Müller/Zarncke)

価値ある威厳あるもの、威厳のあること (Würdigkeit)、高い名声、栄華 (Herrlichkeit) 高位顕職 (Amt und Würde)、名誉 (Ehre)、卓越 (Auszeichnung) 一般。(Lexer)

これらの類語はほとんど *êre* の下位概念と言ってよい。すなわち、*pris* や *lop* や *werde* や *werdeheit* で表されるような物や事はすべて *êre* として表されうる。しかし、逆に *êre* と呼ばれることがすべて *pris* 等でも表されうるかと言えば、それは必ずしもそうではない。特に、理念として行動の目的となる *êre* の意味合いはこれらの類語には含まれないと思われる。ここに類語とは異なる、*êre* が文学において特殊な位置を占めることが示される。

上で見たように、もともと *êre* はゲルマン語に由来すると見なされるが、その意味規定はフランスの文化からの影響を受けている面が強い。フランス語の「名誉」(オノール *honor* > *honneur*) は次のように説明される。すなわち、

〔古代〕ローマ〔で使われていた〕ラテン語に由来して、〔古フランス語の〕オノール (*honor*) は、フランク王国の時代には、依然として高貴な職務、すなわち威光ある公的な職務 (伯、公、司教の職) を指していた。その後、11世紀から、この語はこのような職務が行使されるベネフィキウム (恩貸地) と、それによる収入を指して使われるようになった。」「しかし、時代が下るにつれて、オノールは徐々に評判と混同されがちになった。なぜなら、この社会でオノール〔=職務〕は、他人の視線にさらされたからである。実際にオノール〔=名誉〕は〔……〕貴族にも貴族でない者にも、万人に要求された。これは品位のことだった。すなわち人は、他人の前で『名誉を保つ』のだ。またこれは、勝ち取られるものだった。すなわち人は、戦功や模擬試合により、あるいは、礼儀にふさわしく暗黙の規則により体系化された振る舞いによって、よい評判を勝ち取るのだ。また、公衆の面前で無傷のままに保たなくてはならない財産のことだった。名誉は〔……〕侮辱や非難や中傷、すなわち不名誉によって廃されてしまう。〔……〕名誉を守り、その怨みをそそぎ、回復することは義務であり、血を流すことをも課しうる反応なのだ。(ラベール/セー、79頁以下)

この説明によると、フランス語の「名誉」(オノール) は、人から敬意を受けるような「職務」、その職で受ける「恩貸地」およびそこからの収入を意味していたが、次第に「評判」と同一視された。その「評判」は「品位」として自ら勝ち取り、また守らねばならないものであり、侮辱や避難などの「不名誉」によって名誉を失った場合には、血

を流してでも取り戻すことが義務づけられていたということである。この説明で特に重要なのは、「名誉」(オノール)が、獲得され、また守られ、失われ場合には回復されねばならないものであったという点である。このように人間の行動を規制する理念としての「名誉」こそ、ゲルマン語由来の *êre* が本来持たず、新しく付加された意味である。

2. 宮廷騎士文学における *êre*

宮廷騎士文学における *êre* について、Otfrid Ehrismann (1995: S. 65 f.) はこう述べる。すなわち、「名誉」は隠喩として高い社会的価値を持つものであれば、何でも関連付けられる。例えば、神、キリスト、マリア、十字架から、愛、世界、高名な家、馬、貴族的商人、季節、名声ある国、宮廷など賞賛の対象はすべて名誉となる (Ehrismann: S. 69)。「隠喩として」というのは、「白い粉」が「雪」を意味するように、例えば「神」と言えば賞賛の対象であるので「名誉」を意味するということである。Ehrismann のこの説明は、「名誉」の対象となるものは固定化されていないということを示す。賞賛の対象は社会や時代などによって変わるので、当該の社会が何をよしとするかによって名誉の意味内容が変わる。

また Ehrismann は、「名誉」は換喩として事物や生活界の栄華 (*Herrlichkeit*) や華美 (*Pracht*) を表すと言う (ibd.)。例えば、ハルトマン・フォン・アウエ『イーヴァイン』でカーログレナントはラウディーネの泉で *grôz êre* を見出したが、それは「大いなる華美」(*große Pracht*) [リンケ珠子訳では「素晴らしい光景」] を意味した (Hartmann: Iwein 603)。『ニーベルンゲンの歌』でクリエムヒルトは *in disen hôhen êren* 「この高い栄華の中で」夢を見る (*Nibelundenlied* 13)。またジーフリートとともに *in hôhen êren* 「高い栄華の中で」クサンテンの城に居住する (ibd., 712)。そしてエツェルの国で *maniger êren von Nibelunge lant* 「ニベルンクの国の様々な栄華」(ibd., 1392) を思い出す (ibd.)。このように、*êre* と言うことによって名誉を持つ華美な事物や生活状態が換喩的に意味される。

騎士に関しては、Ehrismann は、名誉は騎士がそのために困難に立ち向かうものであり、騎士は名誉のためには命を懸けると言う (ibd., S. 66)。そのため、*gemach daz ist der êren tôt* 「安逸は名誉の死である」(*Tristan* 4432) ということになる。「名誉」のために騎士には *arbeit* 「苦難」、*manheit* 「勇敢さ」や命を懸けることが求められる (ibd.)。

名誉のために戦うことについては、Ehrismann は、すでにアウグスティヌスが神の命令によって戦争が行われることはありうると言っていることを指摘する (ibd.)。教会を守るために戦死した者は9世紀半ば以降殉教者と見なされ、聖戦は望ましいことと考えられたということである (ibd.)。名誉を求めて死を賭して戦うことが騎士の名誉の理念にも入り込んでいると思われる。

また Ehrismann は、名誉が自力で獲得可能なものであるが、神からの賜物でもあったということを指摘する (ibd.)。*êre* はしばしば *saelde* 「至福」と結びつけられたと言

う (ibd.)。

本論集の主題でもある、男女の「名誉」の違いについて言うと、Ehrismann は、男の名誉は arbeit「苦難」や manheit「勇敢さ」によって規定されていたが、女の名誉は zuht「たしなみ」や schœne「美しさ」によってもたらされると言う (ibd., S. 68)。婦人は名誉を勝ち得たり増やしたりすることはできない。ただ、維持し、守るしかない。男の名誉が能動的にかちとることができるものであるのに対し、婦人の名誉は身分や容姿など、あらかじめ与えられており、受動的な性質が強いと言える。すなわち、wîp mit gûeten / sol ir êre hûeten「すぐれた婦人は自らの名誉を守らねばならない」(Reinmar: MF XXI/LV/5) ののである (ibd., 伊藤論文 16 頁も参照)。

以上、Ehrismann の記述にもとづいて中世文学における êre の意味を概観した。êre は語義として「賞賛されること」もしくは「賞賛すること」を意味するので、賞賛の対象が何になるかが可変的であるのは自然なことと言える。それを決定するのは時代や社会の価値観である。「名誉」が多様な指示対象を持つことは、tugent「美德」が多様であることと表裏一体でもある。「美德」は「名誉」を得るための条件でもあるが、何を「美德」と呼ぶかは社会が決める。個人が属性や能力としての内的に持つ「美德」と、外にいる他者がそれを賞賛することによって得られる「名誉」が内と外の関係として対をなすのである。

「婦人の名誉」について言えば、騎士の名誉は「能動的に」獲得すべきものであるのに対し、婦人の名誉は「受動的に」守るものだという男女の差が議論の基本となる。騎士の名誉が死を賭して戦うことによって得られるということについては、宗教的な聖戦において殉教することが名誉となることが雛形になる。論集全体の議論においては、騎士の能動的な名誉に対する婦人の受動的な名誉という「常識」が文学において果たして破られることがあるのかということが一つの論点となる可能性があることを指摘しておきたい。

3. êre の内面性について

「名誉」は基本的に他者から賞賛されることによって得られるので、現実においては「名誉」ははじめから外面的な性質を持つ。そういう意味で、Maurer (1950/1951) のように êre における内面性を否定するのは自然な考えではある。

Maurer は Gustav Ehrismann (1919) における、キケロの summum bonum「最高善」、honestum「誠実」、utile「有用」が中世の騎士の美德の体系をなすという議論を否定する。Maurer によれば、êre は honor であって、honestum ではない (Maurer 1950: S. 526)。あくまで外的な「名声」、「承認」、「威信」であり、内的・主観的なものではない。Maurer の言う内的・主観的名誉とは、ビスマルクの発言に見られる名誉のようなものを意味する。すなわち、ビスマルクは「私はすべての人の敬意を必要としない。ただ自分自身の敬意があればよい。私の名誉 (Ehre) は私自身の手の中以外の誰の手の中にも

ない。人が私に名誉を与えることはできない。私が自分の心の中に抱いている自分の名誉があれば私には十分だ。誰もそれについて裁くことはできないし、私が名誉を持っているか決めることもできない」(Maurer 1951: S. 75) と述べており、自分が賞賛に値することを自分が分かっているならば、他者からの賞賛は必要ないというのが内面的な「名誉」ということになる。

確かに自分で自分を誉めることを内面的な「名誉」と呼ぶとすれば、そのような「名誉」は中世には存在しないだろう。しかし、Ehrismann が述べるように、神のために命をかけて戦うことで得られる宗教的な「名誉」は、個人の精神に深く関わるという点で内面的であるとも言えよう。騎士の行動を規定する「名誉」がそのような宗教的な「名誉」を土台にしているのであれば、騎士の「名誉」にも内面的な部分があることになるだろう。

ここで注目したいのは、ハルトマン・フォン・アウエの『哀れなハインリヒ』で表される「現世の名誉」と「彼岸の名誉」の対比である。癩病にかかったハインリヒを救うために自分の命を捨てると両親に申し出る少女は二つの「名誉」に言及する。一つ目は社会的に人から賞賛される一般的な「名誉」である。

waz mac uns mê gewerren / danne an unserm herren, / daz wir den suln verliesen /
und mit im verkiesen / beidiu guot und **êre**? (Hartmann: Der arme Heinrich, 491-495)

私たちの殿〔ハインリヒ〕によってよりも、どんなことで私たちが損害を被ることがあるでしょうか。私たちは彼を失うと一緒に富も**名誉**もなくすのだから。

上の引用で表される *êre* は、*guot* 「富、財産」としばしば対になって用いられる、世俗の裕福な暮らしとしての「名誉」である。そうした「名誉」はハインリヒが殿様として自分たちの暮らしを守っているために得られるのであり、もしハインリヒが死ねば失われると少女は述べている。

一方、少女は次のように彼岸の名誉にも言及する。

wie sol ez mir nû ergân, / muoz ich alsus verlorn hân / die rîchen himelkrône? / diu
wære mir ze lône / gegeben umbe dise nôt. / nû bin ich alrêst tôt. / owê, gewaltiger
Krist, / waz **êren** uns benomen ist, / mînem herren unde mir! / nû enbirt er und ich
enbir / der **êren** der uns was gedâht. (Hartmann: Der arme Heinrich, 1291-1301)

私はどうなるのでしょうか。あの立派な天国の冠を私はこうして失わねばならないのでしょうか。あの冠はこの苦しみのために報酬として私に与えられたはずなのに。今や私は初めて本当に死んだ。ああ、全能のキリスト様、どれほどの**名誉**が私たちから、我が殿と私から奪われたことでしょうか。今や彼と私は与えられるはずだった

名誉を受けないのだ。

この「名誉」は、ハインリヒのために命を捨てることによって得られる名誉であり、神のために殉教することに近い。少女はもしハインリヒのために死なないとすれば、この「天国の冠」としての彼岸の「名誉」を受けることができないので、死なせてほしいと両親に訴えている。この「名誉」は、現世における他者からの名誉を排除はしないが、ほとんど問題にしない。中心にあるのは死んだ後に天国で受けられる「名誉」であり、こうした「名誉」は神との関係において得られるという意味では外的に規定される面を残すが、しかし他人の評価を度外視し、あくまで自分の意思によって獲得が目指される点では非常に内面的な名誉とすることができる。

そしてもう一つ指摘しておかねばならないのは、この少女の「名誉」がまさに殉教や騎士が戦いによって得られる「名誉」と同じく能動的性質を持つということである。Ehrismann の一般論から言えば、この少女の能動的な「名誉」は「婦人の名誉」という意味では例外的ということになる。ただし、この能動的に名誉を求めるのが若い少女であって、既婚の婦人ではないということにも注意を向ける必要がある。当時の社会において既婚女性の名誉は何よりも受動的に貞節を守り、夫を裏切らないことである。ここで少女が能動的に名誉を求めることができるのは少女であるからかもしれない。

最後に、議論の導入として挙げておきたいのは、『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルトの「名誉」である。エッツェル王との再婚は兄グンテルにとっては名誉であるが、クリエムヒルト本人にとっては恥辱（不名誉）となる。

swaz der küneginne liebes geschicht, / des sol ich ir wol gunnen: si ist diu swester mîn. / wir soldenz selbe werben, ob ez ir êre möhte sîn. (Nibelungenlied, 1204, 2-4)
妃〔クリエムヒルト〕にとって好ましいことが起こるのであれば何であれ、私は彼女にそれを認めるべきだ。彼女は私の妹だ。もしそれが彼女の**名誉**になるのであれば、我々自身がそれを求めるべきだ。

上の引用はグンテルの言葉である。彼は、巨大な権力と富を持つエッツェル王との結婚はクリエムヒルトに奢侈な生活をもたらすので、そうした「名誉」のために彼女が再婚することをよいと考えている。それに対し、クリエムヒルトはこの再婚を望まない。

und sol ich mînen lîp / geben einem heiden (ich bin ein kristen wîp), / des muoz ich zer werlde immer **schande** hân. (Nibelungenlied, 1248, 2-3)

もし私が身を異教徒に委ねるようなことがあったら、(私はキリスト教徒だ) 私はそのためにずっと**恥辱**を抱えねばならない。

クリエムヒルトがエッツェルとの再婚を「恥辱」と見なす理由はエッツェルが異教徒だということにある。そういう意味ではこの「不名誉」は外的なものであり、グンテルが「名誉」と見なすことと同列にあるかもしれない。しかし、グンテル以下、彼女の兄弟の誰もエッツェルが異教徒であることを問題視しないのは、異教徒との結婚が裕福な暮らしに比べれば大した不名誉とはならないためであろう。クリエムヒルトがそれにこだわるのは、他者からの評価よりも自分の倫理を自分に問うているからだと思われる。その意味ではクリエムヒルトの「名誉」は内面的だと言えよう。

こうした他者からの評価に依らない、自己の判断にもとづく「名誉」を重視するクリエムヒルトは、エッツェルとの再婚の条件としてリュエデゲールに次のような誓いを立てさせる。

Mit allen sînen mannen swuor ir dô Rûedegêr / mit triuwen immer dienen unt
daz die recken hêr / ir nimmer niht versageten ûz Etzelen lant, / des si êre haben
solde, des sichert' ir Rûedegêres hant. (Nibelungenlied, 1258, 1-4)

リュエデゲールは自分の家臣とともに彼女〔クリエムヒルト〕に誠意をもってずっと仕えること、また彼女が**名誉**を保てるような何事もエッツェルの国の高貴な騎士たちが拒まないことを誓った。リュエデゲールはそのことを彼女に握手で確約した。

ここで言われている「名誉」をリュエデゲールは人に賞賛される優雅な暮らしという一般的な意味で受け取ったであろう。しかし、クリエムヒルトはジーフリトへの愛を全うするという内面的な意味での「名誉」を意図していたのではないか。その際、エッツェルと再婚することによって通常の意味での貞節が保たれないことはすでに決定している。クリエムヒルトが「名誉」を保つために唯一残された方法は、ジーフリトを殺しただけではなく、自分を共犯者にもしたハゲネに復讐することだけであった。クリエムヒルトも再婚を選択し、ハゲネを呼び寄せ、フン族の者たちを動かして回復しようとしたのであり、その「名誉」には『哀れなハインリヒ』の少女の場合と同様、能動的な側面があったということになる。

出典

Das Nibelungenlied. Hg. v. Hulmut de Boor. Mannheim: Brockhaus 1988.

Hartmann von Aue: Der arme Heinrich. Hg. v. Hermann Paul, Tübingen: Nimeyer 1984.

参考文献

伊東泰治他『新訂・中高ドイツ語小辞典』同学社、2001年。

ラベール／セール『100語でわかる西欧中世』高名康文訳、文庫クセジュ、2014年。

- Bartsch, Nina: Programmwortschatz einer höfischen Dichtersprache. hof/hövescheit, mâze, tungent, zuht, êre und muot in den höfischen Epen um 1200. Frankfurt a.M.: Peter Lang 2014.
- Benecke/Müller/Zarncke: Mittelhoch deutsches Wörterbuch. 3 Bde. Stuttgart: Hirzel 1990.
- Ehrismann, Gustav: Die Grundlagen des ritterlichen Tugendsystems. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur, 56. Bd., 3./4. H. (1919), S. 137-216.
- Ehrismann, Otfried: Ehre und Mut, Aventure und Minne. Höfische Wortgeschichten aus dem Mittelalter. München: Beck 1995.
- Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearb. V. Elmar Seebold. Berlin: De Gruyter 2011.
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Wörterbuch. 3 Bde. Stuttgart: Hirzel 1992.
- Maurer, Friedrich: Zum ritterlichen „Tugendsystem“. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, 24 (1950), S. 526-529.
- : Tugend und Ehre. In: Wirkendes Wort. 2 (1951), S. 72-80.

『パルチヴァール』における女性の「名誉」

松原 文

はじめに

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール (*Parzival*)』¹⁾はクレティアン・ド・トロワの絶筆となった『ペルスヴァールまたは聖杯の物語 (*Perceval ou le Conte du Graal*)』²⁾の翻案作品である。未完に終わった原典に新たな結部が加わり、主人公が聖杯王に任命されるまでが描かれる。物語の筋は原典からほぼ改変することなくそのまま受け継がれた。クレティアンが残した 9432 行分に対応する部分だけで約 2 倍に拡張され、いくつものエクスクルスや、新しく組み込まれた東方の異教世界を舞台とした主人公の父や異母兄との物語を含めると、全体では約 25000 行というボリュームである。「名誉」への言及も原典と比較して非常に多く、物語内部の登場人物の「名誉」だけでなく、エクスクルスでは繰り返し語り手や受容者の「名誉」も問題にされている。

プロローグで示された婦人の美德

『パルチヴァール』のプロローグには、パトロンへの献辞、原典への言及、名乗りなどの通例あるべき要素がなく、作者の文学論が約 150 行にわたって展開される。その一部は主人公パルチヴァールの形容と読むこともできるが、なによりプロローグで示されているのは筋の進行や人物造形に関する作者の考え方、そして受容者の心構えである。受容者として想定され語りかけられているのは宮廷を構成する女性たちである。

不誠実 (*valsch*) な心は地獄の業火がふさわしく、高い誉れ (*höher werdekeit*) を傷つ

1) ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ『パルチヴァール』のテキストは、Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Studienausgabe. Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von Karl Lachmann, Übersetzung von Peter Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirok. Berlin u. New York: de Gruyter 1998.による。

2) 『ペルスヴァール』の引用は、Schöler-Beinhauer によるドイツ語対訳付テキストを使用した。(Chrétien de Troyes: *Der Percevalroman (Le Conte du Graal)*, übersetzt und eingeleitet von Monica Schöler-Beinhauer, München: Fink 1991. *Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen Ausgaben* 23.) 邦訳は以下を参照した。天沢退二郎訳『ペルスヴァールまたは聖杯の物語』(『フランス 中世文学集 2』所収)、白水社、1991 年。以下『ペルスヴァール』と記す。

ける雹である。不誠実な人の誠実 (triwe) は短い尻尾しか持たないため、3 回刺されても報いられない、虻のいる森で。これらの様々な違いは、男性だけのことではない。女性についても道を示そう。私の忠告に耳を傾けようとする者、そういう女性は、誰に対して自分の名声と名誉 (ir prîs und ir êre) を向けるべきか知らなければならぬ。そして誰にミンネと尊敬 (minne und ir werdekeit) を捧げたらよいのか (知らなければならぬ)。自分の貞節と誠実 (ir kiusche und ir triuwe) を (ふさわしくない相手に捧げて) 後悔しないように。私は善良な婦人のために神に祈る、適切な節度 (rehtiu mâze) が彼女たちに備えられるように。恥じらい (scham) はすべての徳の鏡前である：これ以上のものを女性たちに対して祈ることはできない。不実な (valsche) 女性は偽りの名声 (valschen prîs) を得ることになる。薄い氷ほどのくらいの間そこにあるだろうか、8月の暑い太陽のもとで。これと同じように不実な女性への称賛 (lop) は消えてしまう。³⁾

[中略]

女性らしさ (wîpheit) を堅持している女性に対して、私は容姿や人から見える心の屋根 (身体) を吟味しない。胸の内側 (心) が整えられているなら、彼女の尊敬に値する名声 (werder prîs) は刃こぼれの無いものである。⁴⁾

[中略]

あなた方に新しい話をお聞かせしよう、大いなる誠 (triuwe) と、女性らしい女性のあり方 (wîplîchez wîbes reht) と、困難に対しても決して折れることのない男性らしさについて⁵⁾

語り手は、ガハムレト物語が終わる第二巻末部の「自己弁明」のエクスクルスでも、女性の受容者に呼びかけている。⁶⁾貞淑な (kiusche) 女性の誉れのため (lobes kemphe) の戦いを自分は厭わないと述べる。⁷⁾

3) **valsch** geselleclîcher muot / ist zem hellefiure guot, / und ist **hôher werdekeit** ein hagel. / sîn **triwe** hât sô kurzen zagel, / daz si den dritten biz niht galt, / fuor si mit bremen in den walt. / Dise manger slahte underbint / iedoch niht gar von manne sint. / für diu wîp stôze ich disiu zil. / swelhiu mîn râten merken wil, / diu sol wizzen war si kêre / **ir prîs und ir êre**, / und wem si dâ nâch sî bereit / **minne und ir werdekeit**, / sô daz si niht geriuwe / **ir kiusche und ir triuwe**. / vor gote ich guoten wîben bite, / daz in **rehtiu mâze** volge mite. / **scham** ist ein slôz ob allen siten: / ich endarf in niht mêt heiles biten. / diu **valsche** erwirbet **valschen prîs**. / wie **stæte** ist ein dünnez îs, / daz ougestheize sunnen hât? / **ir lop** vil balde alsus zergât. (2,17-3,10)

4) diu ir **wîpheit** rehte tuot, / dane sol ich varwe prûeven niht, / noch ir herzen dach, daz man siht. / ist si inrehalp der brust bewart, / so ist **werder prîs** dâ niht verschart. (3,20-24)

5) ein mære wil i'u niuwen, / daz seit von grôzen **triuwen**, / **wîplîchez wîbes reht**, / und **mannes manheit** alsô sleht, / diu sich gein herte nie gebouc. (4,9-13)

6) 114,5-116,4. ここでは過去にヴォルフラムの(詩作における)過失で憎み合うこととなった婦人を念頭に、作品を受容する婦人たちに誠実で適切な対応を求めている。

7) swelhem wîbe volget kiusche mite, / der lobes kemphe wil ich sîn: (115,2-3)

宮廷叙事詩は騎士の修練と戦い、そして名誉とミンネの獲得を描く文学ジャンルであるため、装置に根付いた騎士中心の筋の進行や価値観は免れない。婦人は騎士の行動の目的とはなっても騎士と比較すれば受動的な存在であり、女性の登場人物の個人的特性が意志や行動として表されることは少なく、多くの場合、生来の容姿、身分や家族関係が重要な要素となる。婦人の「名誉」がテーマとなる場合においても、それを守る行動をとりうるのは主に騎士であり、女性自身に自分の名誉についての自律性はない。

上記のプロローグと「自己弁明」には様々な美德概念が登場する。「名誉」を表す *werdekeit, prîs, êre, lob* のほか、*kiusche, triuwe, mâze, scham* がある。「名誉」を表す語が他と異なるのは、この概念が他者から与えられる総合的な評価であることだ。とくに受動的な位置に置かれることが多い婦人の場合、「名誉」は行動によって直接的に得られるものではない。プロローグからは、女性の「名誉」は適切な節度 (*rehtiu mâze*) と恥じらい (*scham*) によって担保されていると読みとることができる。別の表現では、ミンネや貞節を適切に正しい相手に捧げることが「名誉」にとっては重要とされている。プロローグ後半部分では総括して、「名誉」とは内面の *wîpheit* (女性らしさ) のことだとされている。

ではプロローグで述べられたこの輪郭のぼんやりした女性の「名誉」が、ヴォルフラム (あるいは話し手) の女性の「名誉」観を概括するものと捉えて良いのだろうか? 「弓の譬え」で早計な判断を戒めているこの作品において、それは一面的ではなかろうか。『パルチヴァール』において「名誉」は少なくとも2つの次元で扱われている。語られる物語の次元と、物語世界を規定する宮廷文化自体を省察しようと試みる物語の外側の次元である。⁸⁾プロローグでは、物語の外側で作品を受容する婦人たちの名誉について語られ、彼女らが自分の「名誉」や徳に心を配るよう求められているのである。次項で述べるように、作品世界がフィクションであることが強調される本作品において、女性の「名誉」の省察は、物語の筋の進んだ先々で受容者に任されていくのだろう。

架空の原典作者キオートーフィクション性と の た わ む れ

ヴォルフラムのパトロンが北フランスの宮廷とつながりを持ち、クレティアン作品を詩人に与えたことは確実視されている。⁹⁾しかし『パルチヴァール』の語り手はクレティアンの翻案ではないと複数回にわたり主張する。第二巻の末部、「自己弁明」と研究上名付けられているエクスクルスにおいて、語り手は自らを「文字」を知らない文盲、そし

8) Vgl. Martin Baisch: *man bôt ein badelachen dar: des nam er vil kleine war.* (167, 21f.) Über Scham und Wahrnehmung in Wolframs Parzival. In: *Wahrnehmung im Parzival Wolframs von Eschenbach.* Actas do Colóquio Internacional 15 e 16 de Novembro de 2002. Hrsg. von John Greenfield, Porto 2004, S. 105-132.

9) Joachim Bumke: *Die Wolfram von Eschenbach Forschung seit 1945.* Bericht und Bibliographie. München 1970.

て自分の作品は「書物」ではないと主張し¹⁰⁾、独学の騎士であるという自意識を示している。ただし、ヴォルフラムは実際には「文字」どころかフランス語を、さらに人名や惑星の名前を列挙する箇所からはラテン語の知識も有していたと推測されている。¹¹⁾また第八巻、ガーヴァーンとアンチコニーエのアヴァンチュールの途中で、自分はプロヴァンスのキオート (Kyôt)¹²⁾の作品に従っていると述べる。続く第九巻、伯父トレフリツェントによって聖杯の情報が明かされ、物語が転回点を迎える直前で、キオートが聖杯の物語を書いたいきさつが説明される。¹³⁾作品の最終場面では、クレティアンが名指され彼は物語を正確に伝えていないとして批判される。¹⁴⁾

これらのテキスト箇所に対して、古くはキオートの実在性を問う原典作者探索の研究が行われたが、70年代以降はそれにいったん区切りがつけられる。ポスト構造主義の影響を受けつつ、「語り手の創出」や「間テキスト性」などの切り口から様々な研究が蓄積し、代表的なものとしては以下のような考察がある。ヴォルフラムは自らの素性や内面を作中で露わにすることによって受容者とのコミュニケーションを図り、関心を惹きつけている。¹⁵⁾また同時代の学識ある詩人たちを念頭に、彼らが原典に支配され（伝統的でないわゆる）書物を著しているのと自分の詩作は異なる¹⁶⁾という矜持を示している。¹⁷⁾また架空のキオートの背景にある異教世界、アラビア文化、そしてラテン語の書記文化の積み重なりは、『パルチヴァール』におとぎ話にはない「歴史性」を与えている。¹⁸⁾ヴォルフラムはフィクションに現実性を与えることで、フィクション性を揺り動かし、その内と外の境の戯れを演出している。¹⁹⁾

10) 115, 5-116,4. この30行×2=60行は、後から追記されたと考えられている。このあと物語はようやくクレティアンに依拠する部分に入っていく。

11) Eberhard Nellmann: Zu Wolframs Bildung und zum Literaturkonzept des Parzival, in: *Poetica* 28 (1996), S. 327-344.

12) キオートの名が初めて登場。416,20-30.アラビア語で描かれた物語はキオートによってフランス語にされ、それがここにドイツ語で語られる。

13) 453,11-455,22. ユダヤ人フレゲターニースが占星術で知った聖杯の物語をアラビア語で記し、キオートがトレドでその書物を発見したこと。彼はアンジューのラテン語の年代記とフレゲターニースの書物を突き合わせて聖杯の物語を読み解き、フランス語で記した。キオートについては Bumke が簡潔に研究史を紹介している。Joachim Bumke: *Wolfram von Eschenbach*. 8. Aufl. Stuttgart/Weimar 2004 (Sammlung Metzler. 36), S. 237-247.

14) 第十六巻の作品の最後の詩節。827,1-11.

15) Eberhard Nellmann: *Wolframs Erzähltechnik. Untersuchungen zur Funktion des Erzählers*. Wiesbaden 1973.

16) Klaus Ridder: „Autorbilder und Werkbewußtsein im Parzival Wolframs von Eschenbach“, in: *Wolfram-Studien*, 15 (1998), S. 168-194

17) Michael Curschmann: *Das Abenteuer des Erzählens. Über den Erzähler in Wolframs 'Parzival'*. in: *DVjs* 45 (1971), S. 627-667.

18) Vgl. Dennis H. Green: *Fiktionalität und weiße Flecken in Wolframs Parzival*, in: *Wolfram-Studien* 17 (2002), S. 30-45.

19) Thomas Rausch: *Die Destruktion der Fiktion: Beobachtungen zu den poetologischen Passagen in Wolframs von Eschenbach Parzival*, in: *ZfdPh* 119 (2000), S. 46-74.

クレティアン・ド・トロワの存在を知っていた受容者たちにとっては、キオートの登場は作品の成立経緯に関する前提を崩すものである。彼らはヴォルフラムの意図に戸惑いながら物語の内部と外部を行き来させられる。それにより、語られた物語にただ没入するのではなく、客観的な視点を持つように誘導されることになる。

婦人の嘆きと騎士の名誉

『パルチヴァール (Parzival)』では、宮廷騎士社会における婦人の嘆きが一つの重要なテーマとなっている。戦いの勝利の名誉を求めて命を落とす騎士像と、夫や恋人の死を嘆く婦人像は、騎士の戦いとミンネを描くこのジャンルにおいて、欠くことのできないレールのようなものである。嘆く婦人を代表する一人目は、パルチヴァールの従妹シグーネであろう。シグーネは、恋人の亡骸を膝にかかえて死を悼む婦人で、『パルチヴァール』では四回登場し、主人公の無知を啓く契機を与える人物である。ヴォルフラムは彼女を主人公としたオリジナルの物語『ティトユレル』を残している。もう一人はパルチヴァールの母ヘルツェロイデであろう。主人公は、まさに夫を失った母の悲嘆の中で誕生する。父ガムレットについて語られる第一巻と第二巻は主人公の物語の前史であり、ヴォルフラムが原典に拠らずに新しく生み出した部分である。以下、ガムレット物語における名誉と婦人の嘆きについて確認していきたい。

ガムレットは妖精の血を受け継ぎ²⁰⁾、その生まれながらの性で、騎士の業とミンネの両方を追究し続ける。婦人とのミンネも彼の冒険を求める衝動を抑えて一所に留まらせることはできない。第一巻でガムレットは最初の妻ベラカーネの元から、何も告げずに手紙のみを残して去る。彼女は肌の黒い異教徒の女王であったが、美しく、慎み深さ (kiusche) と女性らしさ (wîplîch site) を持っていた。²¹⁾ 出立の理由は彼女が異教徒であったことだと残された手紙で読み、ベラカーネは次のように嘆く。

……ああ、愛し合って共に過ごした日々よ、悲しみがこの身を苦しめ続ける。彼の神 (の誉れ) のために洗礼を受けて、彼の望み通りに生きられたら。²²⁾

泥棒のようにこっそりと出立するガムレットであるが、第二巻では自らそのことを振り返って、自分は人が思うようにベラカーネの黒い肌を嫌がって逃げたのではなく、騎士の冒険を行うためだった、と述べている。また彼女とのミンネを裏切ったことについては、次のように主張する。

20) *sîn art von der feien / muose minnen oder minne gern* (96, 20-21)

21) *ez enwart nie wîp geschicket baz: / der frouwen herze nie vergaz, / im enfüere ein werdiu volge mite, / an rehter kiusche wîplîch site.* (54, 23-26)

22) *ôwê lieplîch geselleschaft, / sol mir nu riwe mit ir kraft / immer twingen mînen lîp! / sîme gote ze êren' sprach daz wîp, / 'ich mich gerne toufen sollte / unde leben swie er wolte.'* (57, 3-8)

ミンネを大切にできなかったことを (minnen wankes) 恥じるなら、それはとても男らしい (vil manlich)。²³⁾

こうしてガハムレットはパルチヴァールの母となるヘルツェロイデと出会い、彼女とのミンネのために、数々の騎士の戦いで勝利をあげ、さらなる名誉 (101, 21 werdekeit) を獲得していく。しかしまた再び男らしい勇氣 (101, 22 manlich ellen) に駆られ、妻に暇乞いをしてバグダッドへと冒険の旅に出立し、異国の地で戦死する。ヘルツェロイデの名誉と悲嘆についてはこう語られている。

彼女は望む以上のものを得て²⁴⁾女王としての優れた振る舞いは賞賛 (lobe) され²⁵⁾、その慎み深さ (kiusche) は誉れある (pris) ものとされた²⁶⁾。しかしやがて夫を愛する誠実さ (triwe) が悲しみを呼び起こしたのである²⁷⁾。

ガハムレットの死を報告する使者は次のように言う。

「殿の男らしい誠実さと心からの告解は天国において彼を明るく照らします。彼に不誠実は全くありませんでした。²⁸⁾」

自らの意志で妻を二度捨てたガハムレットだが、語り手によって批判されることは作品全編を通してない。夜中に泥棒のように出奔する場面の描写や、ガハムレット自身の弁明 (注 23) を通して、かすかに否定的なニュアンスが漂うだけである。登場人物たちの発言にはガハムレットに対して批判的なものはなく、むしろ息子パルチヴァールとの対比で彼の男らしいあり方 (manlich) が賞賛される。第六巻、クンドリーエが聖杯城での問いの怠りについてパルチヴァールを非難する場面である。「今思うのは、不実 (valsch) を一切胸の中から刈り取っていたガハムレット²⁹⁾」、「あなたの父上は男の誠実 (manlicher triwe) について知っており、高く広い名声 (hôher prise) を得ていた³⁰⁾」と賞賛する。そしてパルチヴァールを「あなたは救いの追放、幸福に対する呪いであり、真の榮譽について無価値である。あなたは勇敢に獲得する名誉に対して (manlicher êren) 臆病で、あなたの誉れ (werdekeit) は病んでおり、どんな医師にも癒やせない。³¹⁾」と非難する。さ

23) ez ist doch vil manlich, / swer minnen wankes schamet sich. (90, 27-28)

24) ob dem wunsches zil (102, 31)

25) an lobe vant gewin (103, 4)

26) ir kiusche was für pris erkant (103, 5)

27) triwe jâmer regt (103, 22)

28) diu manliche triwe sîn / gît im ze himel liechten schîn, / und ouch sîn riwic pîhte. / der valsch was an im sîhte. (107, 25-28)

29) nu denke ich ave an Gahmureten, / des herze ie valsches was erjeten. (317, 11-12)

30) unt daz iwer vater wære / manlicher triwe wîse / unt wîtvengec hôher prise. (317, 22-24)

31) ir heiles pan, ir sælden fluoch, / des ganzen prises reht unruoch! / ir sît manlicher êren schiech, / und an der werdekeit sô siech, / kein arzet mag iuch des ernern. (316, 11-14)

らに「父があなたに伝えた性質は、あなたの行いとは異なるものである。あなたの名誉 (prîse) はすっかり損なわれてしまった。³²⁾」、「あなたの名声 (prîs) は不実に墜ちてしまった。³³⁾」と批判は繰り返される。

『パルチヴァール』では主人公パルチヴァールに並んで父ガムレット、第二の主人公ゲーヴァーンが筋を担う人物として活躍する。三人とも冒険を乗り越え最後には名誉とミネを獲得するが、そこに至る状況や出会う婦人たちの性質は大きく異なる。語り手は作品をコントロールする者として三者に優劣を付けたり総合的な講評をすることはなく、登場人物による内面の吐露や意見表明が積み重なっていく。

名誉の表現

『パルチヴァール』に「名誉」に関する表現は頻繁に登場する。「名誉」を表す頻出する名詞には prîs (368 例、unprîs は 6 例)、werdekeit (71 例、wirde は 7 例)、êre (108 例、unêre は 5 例) がある。³⁴⁾動詞の過去分詞形 (prîsen, geprîset, êren, gêret など) を含めるとまた大幅に用例は増えるが、本論では名詞の用例に限定して考察を進める。

1 prîs

prîs は 3 つの単語の中で、ドイツ語での使用が始まったのは最も遅く、12 世紀にフランスから輸入された。元々ラテン語で「報酬、価値、金銭」を表す pretium に由来するが、中高ドイツ語では「誉れ」の意で用いられ、「金銭」を意味するようになったのは近世以降である。³⁵⁾

ハルトマンの *Armer Heinrich* (1520 行) では 1 例、*Erec* では 15 例、*Gregorius* (4006 行) では 3 例、*Iwein* (8166 行) では 15 例。ゴットフリートの *Tristan* (18408 行) では

32) der iu ander erbe liez / denn als ir habt geworben. / an prîse ir sît verdorben. (317, 14-16)

33) Nu ist iwer prîs ze valsche komn. (318, 1)

34) 用例の確認には以下を使用した。Clifton Hall: A Complete Concordance to Wolfram von Eschenbach's Parzival. New York and London 1990; Stellenbibliographie zum Parzival Wolframs von Eschenbach für die Jahrgänge 1753–2004, von David N. Yeandle, bearb. von Carol Magner, unter Mitarbeit von Michael Beddow / John Bradley / David Powell / Harold Short / Roy Wisbey: <http://lexcoll.uni-trier.de/conc/index.htm>; Hartmann von Aue. Lemmatisierte Konkordanz zum Gesamtwerk. Bearb. von R[oy] A. Boggs. 2 Bde. Nendeln 1979 (Indices zur deutschen Literatur 12 und 13); C. D. Hall: A complete Concordance to Gottfried von Strassburg's Tristan. Lewiston / Queenston / Lampeter 1993; Franz H. Bäuml / Eva-Maria Fallone: A Concordance to the „Nibelungenlied“ (Bartsch-de Boor Text), with a Structural Pattern Index, Frequency Ranking List, and Reverse Index, Leeds 1976 (Compendia, 7). 語の由来については BMZ: Mittelhochdeutsches Wörterbuch. 3 Bde. Leipzig 1854-1856; Matthias Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, 3 Bde. Stuttgart 1992. のほか、以下の三書を使用した。Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, bearb. von Elmar Seebold, 23. erw. Ausgabe, Berlin, New York 1999; Hermann Paul: Deutsches Wörterbuch, Tübingen 2002; Jacob und Wilhelm Grimm, Deutsches Wörterbuch (<https://www.dwds.de/wb/dwb>).

35) tavelrunder prîses kraft (315,7)

25 例。それに対してヴォルフラムの *Parzival* (24694 行) は突出して多く、368 例。ジャンルは異なるが *Nibelungenlied* では 5 例。『パルチヴァール』では戦いの勝利によって得る栄誉を意味する用例が多い (1.1, 1.2) が、婦人に対しても使用される (1,4)。

1.1 戦いの表現

prîs の用例の大部分を占める。 *bajagen*, *bezaln*, *erstrîten*, *erwerben*, *gern*, *hôhen*, *pflegen* といった動詞と共に、「(戦いで) 誉れを勝ち取る」という表現、反対に *genomn*, *verderben*, *verzagen* と共に、「(戦いで) 負けて栄誉を失う」という表現が多い。また、*prîs* は一語でも戦いの勝利を表す (注37)。

誉れの選抜のために、イテールの鎧が装着されている³⁶⁾

ミネ夫人、ガーヴァーンから誉れを取ろうというのですか³⁷⁾

彼 (トウルコイテ) は槍で誉れを得ようとしている³⁸⁾

1.2 恭順の誓いの表現

クラミデーがパルチヴァールに名誉と実益 (嫁取り) を認める³⁹⁾

パルチヴァールがガーヴァーンに勝利した際の、ガーヴァーンの発言⁴⁰⁾

1.3 円卓

円卓の名声 (問いを怠ったパルチヴァールが加わったことで損なわれる)⁴¹⁾

1.4 婦人に対して

ベラカーネの女性らしい誉れが私を苦しめる⁴²⁾

アンプリーゼは常に婦人の誉れを得ている⁴³⁾

ヘルツェロイデの清らかさ (*kiusche*) は称賛を得る⁴⁴⁾

コンドウィーラーームルスこそ、イゾルデをしのぐ美しさの誉れを得ている⁴⁵⁾

イエシューテが貞節と名誉を失う⁴⁶⁾

36) und wart getragen nâch prîses kûr. (204,4)

37) Frou minne, welt ir prîs bejagn, (585,5)

38) er hât mit speren prîs bejagt, (594,6)

39) du hât den prîs und den frumn. (213,20)

40) ir habt den prîs alhie genomn. / ich hete iur gerne künde, / wâ ich her nâch fünde / mînen prîs, ob ich den suochte. (689,16) あなたはここで勝利した。 / あなたについて教えてほしい、 / どこで今後私は自分の誉れを探せばよいのか / 自分の誉れを取り戻そうとしたときに。

41) tavelrunder prîses kraft (315,7)

42) ir wîplich prîs mir fûeget leit: (91,07)

43) wont an wîplîchem prîse. (94,30)

44) ir kiusche was für prîs erkant. (103,05)

45) het ir kiusche unde ir prîs (264,09)

46) jâ muose prîses walden (187,20)

2 werdekeit, wirde

「価値」、「品位」を表すインドゲルマン語の *werþ* に由来する。12世紀初頭までは形容詞の名詞化された *werdekeit* の用例が多く、次第に *werde* (*wirde*) の使用が増加する。⁴⁷⁾

フェルデケの *Eneasroman* には一度も使用されていない。また、*Armer Heinrich* では2例、*Erec* では6例、*Iwein* では0例。それに対して *Tristan* では12例、*Parzival* では71例と多い。なお *Nibelungenlied* では1例。ヴォルフラムと後続詩人における用例数の多さが際立っている。戦いで得る栄誉も示すが (2.1, 2.2)、*pris* に比べてその頻度は低い。婦人の栄誉については比較的好んで用いられ、人物ではなく聖杯や円卓の誉れを表すこともある。

2.1 恭順の誓い

オリルスがパルチヴァールの勝利を認める⁴⁸⁾

2.2 騎士の名誉

ガムレットは戦いで名誉を得るために故郷を発つ⁴⁹⁾

ガムレットの騎士としての名誉⁵⁰⁾

2.3 聖杯、円卓

イテールの死によって傷つくアーサー王の栄誉⁵¹⁾

聖杯の栄誉⁵²⁾

円卓の栄誉は孤児となった⁵³⁾ (*Parzival* と *Gawan* の出立により)

来訪は宮廷の名誉になる (ガーヴァーンからアーサー王への手紙)⁵⁴⁾

2.4 婦人の名誉

ベラカーネの名誉は楯の中高の如き⁵⁵⁾

アンチコニーエの名誉⁵⁶⁾

武器を持たないアンチコニーエだが、名誉が描かれた盾を持つ⁵⁷⁾

オルゲルーゼが自分 (ガーヴァーン) を受け入れるなら婦人の名誉となる⁵⁸⁾

47) Vgl. Heinrich Götze: *Leitwörter des Minnesangs*, Berlin 1957.

48) *hât werdekeit an mir bezalt.* (267,1)

49) *ich var durch mîne werdekeit* (11,6)

50) *vil rîterlîcher werdekeit.* (24, 17)

51) *Artûss werdekeit enzwei* (160,4)

52) *und des grâles werdekeit,* (326,25)

53) *der werdekeit ein wise* (335,08)

54) *daz möhte an werdekeit in frumn.* (626,06)

55) *si ist [ein] bukel ob der werdekeit.* (91,8)

56) *daz was gein werdekeit ir guot;* (403,28)

57) *ûf den ist werdekeit gezilt:* (414,20)

58) *und werdekeite lêre:* (614,30)

2.5 若者の名誉

若者には多くの名誉があるが、老人にあるのはため息と悲しみである⁵⁹⁾

2.6 werdekeit + prîs (並置される)

クンドリーエのバルチヴァール批判⁶⁰⁾

キングリムルゼルのガーヴァーン批判⁶¹⁾

3 êre

êre は、「畏敬や尊敬」の念を表すインドゲルマン語の語根 ais と同じ語群に属す語で、ギリシャの女神アイドスは羞恥や畏怖を表す神である。当初は他者からの評価を意味したが、次第に自律的な内面の価値をも表すようになった。

prîs や werdekeit と異なりハルトマンとゴットフリート作品での使用頻度が高い。一方、*Parzival* では抑制的である。*Armer Heinrich* では 21 例、*Erec* では 93 例、*Gregorius* では 28 例、*Iwein* では 127 例。*Tristan* では 231 例、*Parzival* では 108 例、*Nibelungenlied* では 139 例。⁶²⁾ 婦人に対して好んで用いられた (3.3) ほか、聖杯城で問いを怠ったバルチヴァールの批判に、3 例 (3.2)。また、神の栄光を表現する (3.4)。

3.1 恭順の誓い

オリルスに勝利、嘆願される⁶³⁾

乙女の純潔を汚したウリーアンス、アルトゥースの前で審判を受ける⁶⁴⁾

3.2 聖杯城での問いの怠りに対する批判

小姓の罵倒：「あなたは名誉が嫌いなのか。」⁶⁵⁾

シグーネの批判：名誉と騎士の誉れを両方を失った⁶⁶⁾

クンドリーエの批判：男の名誉が弱っている⁶⁷⁾

59) jugent hât vil werdekeit. / daz alter siuften unde leit. / ez enwart nie niht als unfruot, / sô alter unde armuot. (5,13-16) 後半は、「これ以上惨めなものはない、年を取ってかつ貧しいということより。」

60) sæzen hie mit werdekeit, (円卓の栄誉を汚す：314,27-28)

61) der dicke prîs hât getân / und hôhe werdekeit bezalt. (321,6-321,7)

62) Kluge, Friedrich: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache; Hermann Paul, Deutsches Wörterbuch, Tübingen 2002; Jacob und Wilhelm Grimm, Deutsches Wörterbuch (<https://www.dwds.de/wb/dwb>)

63) anders swaz dîn êre sîn. (267, 05)

64) ûf al sîn êre und ûf den lîp. (526, 23)

65) vil prîss iuch hât betrâget.' (247, 30)

66) êre und rîterlîcher prîs. (255, 27)

67) ir sît manlîcher êren schiech (316, 13)

3.3 婦人の名誉

エーシューテの名誉⁶⁸⁾、リアーセに与えられた名誉⁶⁹⁾、乙女の名誉⁷⁰⁾、アンチコニーエの名誉⁷¹⁾、オルゲルーゼの名誉⁷²⁾、イトニエーの誠実と名誉⁷³⁾

3.4 神

神の栄光のために⁷⁴⁾

『パルチヴァール』の「名誉」を表す3つの名詞の使用には、次のような特徴が見てとれる。最も用例数の多い *pris* は、騎士の戦いにおける勝利や恭順の誓いの用例が大半を占め、動詞と組み合わせた定型的な表現もある。婦人に対する使用もまた相当数見られる。*werdekeit* と *êre* はヴォルフラムと他の詩人の傾向に逆転が見られる。*werdekeit* の用例はヴォルフラムだけに多いのに対し、*êre* はハルトマンとゴットフリートに好まれ、ヴォルフラムでは使用頻度が低い。『パルチヴァール』における *werdekeit* は、騎士の戦いの名誉と並んで、婦人の名誉、円卓や聖杯の（非人物の）誉れも表す。*êre* は、戦いの名誉を表す用例の割合が一段低く、パルチヴァールが問いの怠りによって失った名誉や、婦人の名誉、神の栄光を表すことが多い。このように3つの名詞には緩やかな相違があることが確かめられた。ただ、単語の並置（例：注 66）や、近い位置で同じ内容を別の単語で言い換えるようなケースも見られ、厳密に区別することはできない。

婦人の名誉

婦人の名誉は受動性が強く、騎士が戦いにおける勝利で名誉を得るように主体的な行為とは結びついていないことが多い。婦人においては、名誉は様々な美德の総体であり、その裏付けや輪郭は曖昧なものとなる。ここでは平均的な女性像とは異なるシグーネ、アンチコニーエ、オルゲルーゼの三人の名誉を考察したい。この三人は宮廷の規範から逸脱した自らの意志や行動によって、筋の担い手である騎士の道程に関与する。そして彼女たちの名誉は、他者（語り手やガーヴァーン）の発言によって、客観的に示されていく。

シグーネ

パルチヴァールの従妹シグーネは、女性の悲しみと貞節を体現する人物で、一騎討ちで亡くした恋人を慕い、森の中でその亡骸を抱いて座り、最後は恋人を埋葬した棺に寄

68) *wan schadet ez iu an êren* (132,17)

69) *sunder minn bôt êre*. (179,29)

70) *unt durch magtuomlich êre*. (526,29)

71) *sol wîplich êre sîn gewin* (404,24)

72) *ich riet iu wîplich êre* (614,29)

73) *si mant in triwe unt êre* (686,21)

74) *dâ man gotes êre sprach* (461,5), *daz got durch sîn êre* (480, 14), *durch die gotes êre* (485, 28)

り添って死ぬ。パルチヴァールは冒険を求めて移動する道程で、偶然に何度も彼女と出会い、自分の知らない自分の来歴や聖杯について教えられる。語り手はシグーネの四度の登場のすべてで、彼女の恋人への「誠 (triuwe)」に言及する。以下は、三度目の邂逅の場面である。

彼女は神への愛のために / 乙女と喜びを差し出し、 / 女性の悲しみの泉が / 彼女の心から常に咲き出でた、 / 死んだ恋人への古い誠実 (貞節) のために⁷⁵⁾

語り手はさらに『イーヴァイン』のラウディーネと彼女に再婚を勧める侍女ルーネテを引き合いにして、婦人は貞節 (triuwe) によって名誉 (êre) を得られると主張する。

ルーネテは自分の女主人にしたような軽率な助言を (シグーネには) ためらったろう。⁷⁶⁾婦人は (夫が死んだ) 後は、したいようにすればよかろう。(だが) : 名誉 (êre) を保つなら (死んだ夫への貞節を守るなら)、楽しむために踊りに行くことで得る冠よりも輝かしい冠を得る。⁷⁷⁾

アンチコニーエ

ガーヴァーンはキングリジーン殺しの疑いをかけられて仇討ちの挑戦を受け、その息子フェルグラハト王の国に一騎討ちのためやってくる。王の妹アンチコニーエはガーヴァーンを客人として歓待するが、その親密な様子に城下の家臣団が憤り、彼女は滑稽にもチェスの盤と駒を使い、客人を守るために大胆に戦う。チェスを武器とするこの珍しい女性像はクレティアンによって生み出されたものである。原典では彼女の奇抜な行動について特にコメントされていなかったのにたいして、ヴォルフラムはアンチコニーエ自身の言葉と語り手のからかいや当てこすりを追加している。また、一騎討ちの刻限まで身の安全を保証したガーヴァーンを多勢で攻撃するという騎士の信義にもとる行為についても言及される。休戦の後、彼女は兄の騎士たちを批判し、次のように言う。

私は武器を持たない乙女で一つ楯だけを持っています。そこには**誉れ** (の装飾) が施されています。⁷⁸⁾

(この紋章は) **正しい振る舞いと貞淑さ**を表し、これら二つと共に変わらぬ心 (恒心) があります。私はこの楯を兄上が私のところに寄こした騎士の前に置いて彼を

75) diu durch die gotes minne / ir **magetuom** unt ir **freude** gap. / **wiplicher sorgen** urbap / ûz ir herzen blüete alniuwe, / unt doch durch **alte triuwe**. (435,14)

76) dâ hete sich frou Lûnete / gesûmet an sô gæher bete / als si riet ir selber frouwen. (436,5)

77) dar nâch tuo als siz lêre: / behelt si dennoch **êre**, / sine treit dehein sô liechten kranz, / gêt si durch freude an den tanz. (436, 19)

78) dô was ich âne wer ein magt, / wan daz ich truoc doch einen schilt, / ûf den ist **werdekeit** gezilt: (414, 18)

守りました：このほかに私は楯を持っていません。⁷⁹⁾

あなた（兄）は私（アンチコニーエ）に対して不当な仕打ちをしました、**婦人の名誉**（wîplich prîs）を正しく評価しようとするならば。⁸⁰⁾

よく聞くことですが、騎士が婦人の庇護を求めて逃げて行ったなら、どんなに激しい攻撃の最中だったとしても追うのを諦めなければならない、もし**男性らしい礼儀**（manlich zuht）があるならば。⁸¹⁾

語り手はアンチコニーエを、すなわち初対面の騎士と即座に懇ろになり、彼のためにチェス盤と駒で戦い抜いた大柄な女性を、貞淑（kîusch）だと揶揄する。「貞淑」のような婦人の名誉に不可欠の美德は、到底金銭などで獲得することはできないという「常識」を踏まえてからかうのである。

婦人の名誉（wîplich êre）を買うことができるなら、彼女はたくさん購入したのだ、不誠実な取引は避けて：そうして彼女の**貞淑さ**（kîusche）は**名誉**（prîs）を得た。⁸²⁾
貞淑で愛らしい婦人、アンチコニーエに称賛をもって（mit lobe）挨拶しなければ。この不実のない人に。⁸³⁾

彼女がそのような生きているのだから、その**名誉**（prîs）は偽りの言葉によって荒らされることはない。⁸⁴⁾

彼女の**名誉**（prîs）について聞いた人は皆こう願いを口にする、不実で澱んだ噂からその名誉が守られるようにと。⁸⁵⁾

なお第八巻は、上記の記述以外にも、ヴォルフラムがクレティアンの原典には存在しない語り手によるコメントや、「間テクスト」の試みが何箇所も挿入されている挑戦的な巻である。『エーレク』のエーレクとエニーテ（401）、『ニーベルンゲンの歌』のルーモルト（420）、フォーブルクの辺境伯の妻で、大柄な点がアンチコニーエと同じエリーザベト（404）、『エネイート』のフェルデケ（404）が、情景や人物造形の連想、人物描写

79) **guot gebærde und kîuscher site**, / den zwein wont vil stæte mite. / den bôt ich für den ritter mîn, / den ir mir sandet dâ her î: / anders schermes het ich niht. / (414, 23)

80) ir habt doch an mir missetân, / ob **wîplich prîs** sîn reht sol hân. / (414, 29)

81) Ich hôrt ie sagen, swa ez sô gezôch / daz man gein wîbes schirme vlôch, / dâ solt ellenthafter jagen / an sîme strîte gar verzagen, / op dâ wære **manlich zuht**. / (415,1)

82) sol **wîplich êre** sîn gewin / des koufes het si vil gepflegn / und alles valsches sich bewegn: / dâ mite **ir kîusche prîs** erwarp. (404, 24)

83) mit lobe wir solden grüezen / die **kîuschen** unt die süezen / Antikonîen, / vor valscheit die vrîen. (427,05)

84) wan si lebte in solhen siten, / daz ninder was underriten / ir **prîs** mit valschen worten. (427,09)

85) al die ir **prîs** gehôrten, / ieslich munt ir wunschte dô / daz ir **prîs** bestüende alsô / bewart vor valscher trüeben jehe. (427,12)

の筆致力の想起などを通して引き合いに出されている。初めてキオートが登場するのも第八巻である(416)。ここでは語られた物語内部で人物の評価や筋の進行を受容するのではなく、ある程度の文学的素養を持つ受容者が、他作品の登場人物と比較し、人物評価の基準が物語外部と行きつ戻りつする間で動くのを認識し、それを楽しむことが求められているようである。アンチコニーエの「貞淑さ」や「女性らしさ」という宮廷騎士文学に対する逆説的な表現を通して、「女性らしく」あるため、また「貞淑」であるために閉ざされている世界もあるのかもしれない、と想像させられる。『パルチヴァール』の語り手は宮廷社会を否定するわけではないが、その限界の先の世界の存在を、皮肉や冗談の中で示している。

オルゲルーゼ

オルゲルーゼは最終的にガーヴァーンの恋人となる公妃である。過去に恋人を失った際に受けた心の傷のために、他者を信じることをやめ、ガーヴァーンに対してミンネ奉仕を超えた難題をかざし横暴な言動を繰り返す女性である。クレティアンから受け継がれた人物像であるが、その高慢さの背景や二人の物語の結末はヴォルフラムにオリジナルなものである。以下は、ガーヴァーンからオルゲルーゼに向けられた言葉である。

(ガーヴァーンに罵詈雑言を浴びせたことについて) 償うことによってあなたは**名誉** (êre) を得ることになります。⁸⁶⁾

たとえそれ(あなたが私ガーヴァーンの奉仕を嘲ること)が私には痛みとなくなっても、その行為であなたの**誉れ** (werdekeit) は傷つきます。⁸⁷⁾

ご婦人よ、私はあなたを許しました。もし私の愚かな忠告を礼儀正しく嘲らないでお聞きになるのなら、**婦人の名誉と誉れの教え** (wîplîch êre / und werdekeite lêre) をさしあげましょう。⁸⁸⁾

従来のミンネ奉仕において婦人が静で、騎士が動の役割を担っていたとしたら、ここでは癒やして克服しなければならない心の傷と猛りを持つオルゲルーゼが動で、ミンネ奉仕に淡々と挑み続けるガーヴァーンは静の存在であり、男女の立ち位置は交換されている。ヴォルフラムは男性がミンネ奉仕によって名誉 (êre) を得るという定型の反転バージョンを理想の騎士とされるガーヴァーンに与えたと言えよう。

86) ir habt ergetzens **êre**. (515, 20)

87) ob ez mir nimmer wurde leit, / ez krenket doch iur **werdekeit**. (524, 07)

88) frouwe, ich hân ûf iuch verkorn. / ob ir iu mînen tumben rât / durch zuht niht versmâhen lât, / ich riet iu **wîplîch êre** / und **werdekeite lêre**: / (614, 26)

まとめ——wîplîch な「名誉」

女性の「名誉」が語られる部分にはwîplîch⁸⁹⁾という単語が登場する例が多い(作品全体では36例)。本論で確認してきたプロローグ、ベラカーネ、シグーネ、アンチコニーエ、そしてオルゲルーゼに対しては、みなwîplîchと形容される「名誉」を持っていることが認められたり、そのような「名誉」を持つことを求められたりしている。またプロローグやガハムレト物語(注23)、パルチヴァールに対する批判、騎士の守るべき信義を表す箇所(注81)をはじめとし、manlîchも多数使用されている(全体で77例)。

作品の一部に限定すれば、wîplîchとmanlîchはそれぞれ「控えめな振る舞いや貞淑さ」や「戦いにおける優れた振る舞いや勇気」と読み解く事が出来るだろう。だが、わざわざ同じ語が用いられているにもかかわらず、それが全く当てはまらない箇所もある。アンチコニーエとオルゲルーゼにおいては、wîplîchの内容がまさに反転され、本来「女性らしさ」の中心に据えられるはずの貞節さや節度さの欠如が主題となっている。manlîchな「名誉」についても同様で、manlîchという単語が他の詩人と比較して多用されているにもかかわらず、「男らしさ」の内容は様々な領域に散りまたがる。『パルチヴァール』において「名誉」は人物の行動の契機であることだけは確かなものの、登場人物や状況、受容者の視点によってその内容は異なる。

89) 平尾浩三、中高ドイツ語文芸作品における wîplîch と manlîch—その使用の状況をめぐる 覚書、慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』60号(1992年)、175-204頁。

ミンネザングにおける婦人の名誉

——「婦人の歌」を中心に——

伊藤 亮平

0. はじめに

本稿では、ミンネザングに見られる女性の名誉について、ミンネザングの全盛期である12世紀後半のリートを比較しながら、主にラインマル・デア・アルテ Reinmar der Alte の婦人の歌をはじめとした、女性のセリフを中心に考察したい。なお本稿では、語り手を明確にするために、男性のセリフは（男性）、女性のセリフは（女性）と記載する。

1. 女性の名誉について

まず名詞 *êre* の用例数からみていきたい。*êre* の用例数は、1160年代から1200年ごろの、主にヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァルデ Walther von der Vogelweide が活動する以前のリートを収録している歌謡集『ミンネザングの春』¹⁾のリートにおいては、*êre* は85例見られる。

êre はヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデが多用しており、85例見られる。ヴァルターと同年代では、ラインマル・デア・アルテ Reinmar der Alte が多く使用している。ラインマル以前にも *êre* の用例は見られるが、ラインマル以降増加傾向にあると考えられる。

ミンネザングでは、神の名誉、男性の名誉、女性の名誉について言及されている。早い段階から女性の名誉について述べているのが、1170-90年に活動した、ハインリヒ・フォン・フェルデケ Heinrich von Feldeke である。フェルデケは女性の名誉に関して次のように述べている。

1) Des Minnesangs Frühling. Unter Benutzung der Ausgaben von Karl Lachmann und Moriz Haupt, Friedrich Vogt und Carl von Kraus. Bearbeitet von Hugo Moser und Helmut Tervooren. I. Texte. 38., erneut revidierte Aufl. mit einem Anhang: Das Budapester und Kremsmünsterer Fragment. Stuttgart (Hirzel) 1988. 以下 MF と略する。なお、断りがない限り、本論ではこの版からリートを引用した。なおこの歌謡集には、ヴァルターの作品は収録されていない。

Ich wil vrô sîn durch ir êre,
diu mir daz hât getân,
daz ich von der riuwe kêre,
diu mich wîlent irte sêre.

[…]

diu mir gap rehte minne,

(男性) 私は彼女の名誉ゆえに喜びたい、/ 彼女は、ずっと私をひどく悩ませてきた
悲しみから /私を開放してくれたのだ。/ […] / 彼女は正しいミンネを私に与えて
くれた。

(フェルデケ MF 59,23 第3節 1-4, 8行)

フェルデケは、女性の名誉は女性自身のみならず、男性にとっても喜ばしいことだと語る。優れた女性は男性に「正しいミンネ」(rechte mine) を男性に与えることができる。それゆえ名誉ある女性を愛することが男性の喜びにつながると解いている。

そして「正しいミンネ」を持つものは同時に「名誉」をも所有していると述べている。

Dô man der rechten minne pflac,

dô pflac man ouch der êren.

(男性) 正しいミンネを持っていた者は、/ 名誉をも持っていたのだ。

(フェルデケ MF 61,18 第1節 1-2行)

名誉を持つからこそ男性は喜びを増すことができるという考えはフェルデケの以下の箇所からも伺える。

swer mit êren

kan gemêren

sîne blîtschaft, daz ist guot.

(女性)名誉によって / 自身の喜びを増すことができるなら、それは良いことです。

(フェルデケ MF 60,13 第1節 6-8行)

フェルデケは男性が名誉を持つ意味について、女性の口から語らせる。上の引用に続く第2節では、男性が同じセリフを述べる。フェルデケのリートでは、男女双方が「名誉」を問題としている。

ミンネザングとは趣が異なるが、ヴァルターと同時期に活動したと考えられているシュペルフォーゲル Spervogel の格言詩では、女性の内面的美徳が強調されている。

Treit ein reine wîp nicht guoter kleider an,
sô kleidet doch ir tugent, [...],
[...],
swie vil ein valsche kleider treit, sô ist doch ir êre kleine.

心の清らかな女性は良い衣服を着なくとも、/彼女の美德が彼女を着飾らせる、/ 不
実な女性がどれほど多くの衣装を着ようとも、彼女たちの名誉は小さい。

(シュペルフォーゲル MF 24,1 第1節 1-2, 6行)

シュペルフォーゲルは、「清らかな」(rein)を女性の「美德」(tugent)と捉えている。女性
が「不実」(valsh)ならば、衣装に象徴されるような、外面的な美や財産は女性の名誉
に値しないと彼は解く。すなわち清らかさという内面的美德を備えていることが女性の
名誉のひとつであることをシュペルフォーゲルは衣服の比喩を交えて端的に述べてい
る。

2. êre における能動性と受動性

ミンネザング、特に「高きミンネ」を扱うミンネザングにおいては、意中の女性に対
して称賛の言葉を捧げるなど、男性は女性奉仕を行うが、一部の例外を除いて男女が結
ばれることはない。それは女性が既婚だからという前提もあるが、同時に精神修養とい
う側面も垣間見せる。アルブレヒト・フォン・ヨハンスドルフのリートでは、報われな
いのなら何のために女性奉仕を行うのか、男性は女性に尋ねる。男性の問いに対して女
性は端的に答えている。

daz ir dest werder sint unde dâ bî hôchgemuot.

(女性) あなたがますます立派になり、高揚した気持ちになるためです。

(ヨハンスドルフ MF 93,12 第7節 6行)

このリートでは、人格陶冶を図り、高揚した気持ち (hôchgemuot)を得ることが女性奉
仕の目的と述べられている。とはいえ、奉仕によって意中の女性を手に入れることがで
きるか否かは曖昧にされている。本来は意中の婦人と結ばれることは男性の騎士的魅力
や内面の素晴らしさの証左であり、騎士の名誉といえるのだが、ミンネザングの主要テ
ーマである「高きミンネ」においては、婦人と結ばれないことが逆に騎士の名誉をもた
らす。愛の苦しみに耐え続けるという被虐的態度が、騎士の誠実さや我慢強さといった
内面的美德の象徴として称揚される。すなわち報われなくても拘らず、女性奉仕を続け、
自分の奉仕に報いようとしない女性の冷淡さに耐えることが、男性の「誠実さ」(triuwe)
や「変わらなさ」(stæte)の証となり、男性の「名誉」(êre)につながるのである。

叙事詩と同様に、ミンネザングにおいても男性は能動的に活動することによって、「名

誉」(êre)を獲得することが求められる。ラインマルは、良き人々と交際することと、名誉を求めることで幸福(saelic)で立派(wert)になると唱える。

Es wirt ein man, der sinne hât,
vil lîhte saelic unde wert,
der mit den liuten umbe gât,
des herze niht wan êren gert.

分別のある男は、/ 高貴な人々と交わり、/ 心がただ名誉だけを求める時、/ いても容易く幸福で立派になる。

(ラインマル MF 150,10 第1節 1-4行)

このように、男性にとって名誉は、女性奉仕などによって能動的に獲得するものとして描かれる。

しかしミンネザングにおいて、女性はすでに名誉を備えているものとして登場する。

Ich bin ein wîp, ein wîp dâ her gewesen
sô stæte an êren und ouch alsô wol gemuot:²⁾

(女性) 私はこれまでずっと、/ 名誉を守り、快活な気持ちでいた女性でした。

(ヴァルター L111,22 第2節 1-2行)

男性にとっては、奉仕により自己を向上させることで名誉が得られ、また自己向上そのものが喜びである。それに対して、女性はすでに名誉を獲得しており、それを守ることが喜ばしい気持ちにつながっている。ヴァルターは下記のリートでも、女性がすでに名誉を得ていることを述べている。

Lât iu sagen, wiez umbe ir zouber stât,
des sie wunder treit:
sie ist ein wîp, die schœne und êre hât,
dâ bî liep und leit.

(男性) 彼女が持っている魔法がどのようなものか、聞いてください。/ 彼女は美と名誉を、/ それから愛と苦しみを持っている。

(ヴァルター L115,30 第5節 1-4行)

2) ヴァルターのリートは、下記の版から引用した。Bein, Thomas (Hrsg.): Walther von der Vogelweide. Leich, Lieder, Sangsprüche. 15., veränderte und um Fassungseditionen erweiterte Auflage der Ausgabe Karl Lachmanns. Berlin (De Gruyter) 2013.

このリートでは、美と名誉が並列されている。ただし女性は美しくすでに名誉を獲得しているものの、その名誉を失うという可能性を孕んでいる。そのため女性は自身の名誉を守ることが求められる。ラインマルのリートでは次のように述べられている。

Wip mit güeten
sol ir êre hûeten.

(男性) 良き女性は、 / その名誉を守らねばならない。
(ラインマル MF 199,25 第5節 7-8行)

すでに所有している名誉を守ることが、女性の名声をさらに高めることにつながる。ミンネザングにおける女性の名誉とは、簡潔に言えば男性の求愛に対して容易になびかないという貞淑さであり、また男性と相愛だとしても、周囲の人々の嫉妬や、二人の様子を探る「見張り」(merkaere)によってその関係が露呈してしまえばこれまでの社会的な名声を失いかねない。³⁾

またヴァルターは、女性を称賛しつつ、女性の名声を高めているのは、女性を讃える歌人であることをさりげなく主張する。

Disen wunneklîchen sanc
hân ich gesungen mîner [] frouwen ze êren.
des sol sî mir wîzen danc,
wan ich wil iemer durch si fröide mêren.

(男性)この喜ばしい歌を / 私の婦人の名誉のために歌った。 / そのことで彼女は私に感謝すべきである、 / なぜなら、私はこれからも彼女のために喜びを増やすつもりだからだ。
(ヴァルター L118,24 第3節 1-3行)

ミンネザングでは、男女の立場が逆転し、女性を神聖視する傾向があるが、ヴァルターは「彼女が私を殺せば、彼女も死ぬのだ」(L72,31 第4節 7行目)と述べ、女性の名声を支える歌人としての立場を強調する。⁴⁾それは女性が名誉に関しては受動的立場に置

3) 特に 1160-1170 年代のミンネザングでは、「見張り」(merkaeren)の存在という外的な要因によって、男女の逢引が阻害される様子が描かれている。ヴェルナー・ホフマン、岸谷敏子、石井道子、柳井尚子 訳著: ミンネザング ドイツ中世恋愛抒情詩選集 (大学書林) 2001 年、268 頁参照。例えば、マインロホ・フォン・ゼーヴェリゲン Meinloh von Sevelingen MF 13,14 では、見張りによって、男女の間柄が周囲の噂の的になってしまっている状況を女性が嘆いている。

4) このヴァルターの 1 行は、以下のラインマルのリートのパロディーとなっている。「彼女が死ねば、私も死ぬのだ」(stirbet sî, sô bin ich tôt. ラインマル MF 158,1 第3節 8行目)。

かれていることを示唆すると言えよう。

語り手が男性のリートで述べられる女性像とは、美しく気高いが、男性の手には容易に届かない存在であり、時として男性の奉仕に対して冷淡な人物として描かれることが主である。

しかし、語り手が女性である「婦人の歌」(Frauenlieder)では、対照的に恋に悩む等身大の女性が描かれる。「婦人の歌」は、あくまで作者の男性からみた女性の心情ではあるが、イングリット・カステンが指摘するように、女性の視点から男女の恋を描き、通常のミンネザングに登場する冷淡な女性とは異なる、男性に恋する女性象という、女性の二面性を描いている。⁵⁾

「婦人の歌」(Frauenlieder)とは狭義的には、女性のモノログで構成され、「高きミンネ」が発生する以前の1160-1170年代の歌人、例えばデア・フォン・キューレンベルク Der von Kurenberg やディートマル・フォン・アイスト Dietmar von Eist のリートにも見られる。⁶⁾ 狭義の「婦人の歌」はそれほど数多く残されていないものの、中世ドイツ伝統のジャンルと言えるだろう。

3. ラインマル・デア・アルテの「婦人の歌」における女性の名誉

ラインマル MF 186,19 Ungenâde und swaz ie danne sorge was では、かつて男性に対して求愛の言葉や歌を自分に述べることをやめるように伝えたことに対して、煩悶する女性が描かれている。

Der mir ist von herzen holt,
den verspriche ich sêre,
niht durch ungevüegen haz,
wan durch mînes lîbes êre.

(女性) あの方は心から私に好意を寄せてくださっています。/私があの方をきっぱりと拒絶するのは、/ひどい憎しみのせいではなくて、/ただ私自身の名誉のためなのです。

(ラインマル MF 186,19 第1節 7-10行)

ラインマルの別のリート MF 177,10 では、求愛の歌や言葉を女性から拒まれた男性が、女性の許可がおりるまで二度と歌わないと誓っている、ということが、使者を通じて女性に伝えられる。男性の発言を受けて、女性は男性を内心は慕っているという己の心情を独白する。女性は男性のことを「愛しく素晴らしい人」(lieben guoten man)と呼ぶも

5) Vgl. Kasten, Ingrid (Übers. und Hrsg.): Frauenlieder des Mittelalters. Zweisprachig. (Reclam) Stuttgart, 1990, 17f.

6) 例えばキューレンベルク MF 8,33 やアイスト MF 37,4 を参照。

ものの、自分のことを構わないで欲しいとも述べる。女性は minne と ère との間で煩悶する。フェルデケのリートでは名誉は男女に喜びをもたらすものとして表現されていたが、ラインマルのリートでは苦しみの要因ともなっているのである。

さらにラインマルは、「婦人の歌」と「使者の歌」(Botenlieder)という二つのジャンルを巧みに組み合わせて、女性の心情を描く。

Ê daz du iemer ime verjehest,
daz ich ime holdez herze trage,
sô sich, daz dû alrêst besehest,
und vernim, waz ich dir sage:
Mein er wol mit triuwen mich,
swaz ime danne muge zer vröiden komen,
daz mîn ère sî, daz sprich.

(女性が使者に向かって)私があの人に心を寄せていることを伝える前に、/ まずはお前の目でよく確かめなさい。/ それから私がお前に言うことをよく聞きなさい。/ もしあの人が誠実に私のことをお考えなら、/ その時は、あの人が喜びそうなことで、/ 私の名誉になることを / 言ってお上げなさい。

(ラインマル MF 178,1 第3節 1-7行)

この MF 178,1 Lieber bote, nu wirp alsô では、女性は使者に向かって話しかけているが、使者は一言も発していない。作中の使者の存在は、女性の内面独白を促すためのきっかけにすぎない。このリートは「使者の歌」という体裁を取りながら、実質的には女性のモノローグとなっている。

そして MF178,1 においても女性は、男性を慕っているのだという己の心情を吐露するとともに、やはり名誉を問題にする。女性は「ミンネというのは本当に難しい遊戯です、/ 二度と始めたいと思わないほど」(minne ist ein sô swaerez spil, daz ichs niemer tar beginnen MF 186, 19)と述べる。そして女性は、ミンネについて苦悩する様子を覗かせる。

Des er gert, daz ist der tôt
und verderbet manigen lîp;
[...]
Minne heizent ez die man
unde mochte daz unminne sîn.

(女性)あの人を求めているのは死です。/ そのために身を滅ぼす人は大勢います。
[...] 男の人たちはそれを「ミンネ」と呼びますが、むしろ「非ミンネ」と呼ぶ方が

ふさわしいでしょう。

(ラインマル MF 178,1 第4節 1-2, 5-6行)

男性にとって女性の獲得は、これまでの女性奉仕が報われたという点において「名誉」といえるかもしれない。しかし女性にとっては、仮に女性が既婚者であるなら、愛の成就是周囲の人々に見つかってしまえば、これまで得ていた貞節という社会的名声を揺るがせることになり、それは結果的に男女ともに不名誉につながりかねない。いわばミンネは女性の感情を揺さぶり、これまで女性が得ていた、「快活な気持ち」(wol genuot)や名声を揺るがせるものでもある。

MF178,1 のリート最終節では、女性はこれまで使者に話した内容を一切男性に伝えないように頼む。女性は己の名誉を守ることを選択する。

dûn solt im nimer niht verjehen

alles, des ich dir gesage.

(女性が使者に向かって) 彼には、絶対に言ってはなりませんよ、/ 私がお前に話したこと全て。

(ラインマル MF 178,1 第6節 6-7行)

女性は最終的に自分の好意を男性に伝えないことを選ぶ。相愛でありながら恋愛を成就させないことで、女性は己の名誉を守り、そして男女ともに恋に苦しむことで関係を維持しようとする。女性は男性を愛しながらも、己の名誉のために彼の求愛を拒み続けて苦しむという被虐的態度により、これまでの社会的名誉を守りつつ、一途で誠実な女性としての名誉をさらに高めるのである。

さらに、このリートでは自分の思いを男性に言わないようにと使者に伝えるものの、実際には聴衆に暴露されている。ラインマルは、男性を慕っているのだという女性の心情と、己の名誉に鑑みてその思いを伝えまいとする相反した感情を、一言も発しない使者を登場させることで表現するのである。

4. 「高きミンネ」の矛盾とミンネの苦しみ

以上のようにラインマルの婦人の歌では、女性は男性と同様に恋に苦しむ存在として描かれている。特に女性の立場では己の心情と名誉に煩悶する様子が描かれる⁷⁾。ラインマルの他にも、例えばヴァルター のリート L113,15 では、女性は「男性の望み通りにしたいのですが / それを拒み、女性の名誉(wîbes êre)を守り続けねばなりません」(Gerne het ichz nû getân, /wan daz ich muoz versagen und wîbes êre sol begân. ヴァル

7) minne と êre の相剋は、Hartmann MF216,1 第4節, Walther L113,31 第3節でも描かれている。

ター L113,31 第3節 5-6行)と語っており、婦人の歌では、あたかも女性の貞節さと同時に、恋の苦しみを描くために、敢えて名誉(êre)を取り上げているかのように映る。

無論ミンネザングには、恋の喜びや男女の逢瀬なども描かれている。⁸⁾しかし、殊に「高きミンネ」においては恋愛にまつわる苦しみが主題を占める。先述したように、女性が既婚者だから、あるいは二人の関係を訝しむ周囲の人々など外的要因というのだが、「高きミンネ」においては、これらの要因に加えて、別の内的要因が存在する。

Zwei dinc hân ich mir vür geleit,
diu strîent mit gedanken in dem herzen mîn:
ob ich ir hôhen wirdekeit
it mînen willen wolte lâzen minre sîn,
Oder ob ich daz welle, da si grozozer sî
und sî vil saelic wîp bestê mîn und aller manne vrî.

(男性)二つのことが私にはあった、/ この二つが私の心の中で争っている。/ 彼女の気高き称賛を私の意思で貶めるのか、/ それとも彼女の称賛が大きくなり、最も至福に満ちたあの女性が、/ 私や他の男たちから遠ざかっていくことを望むべきなのか。

(ラインマル MF 165,10 第4節 1-6行)

本来であれば、女性奉仕が報われることは男性の名誉である。しかし女性と容易に結ばれることは、これまで歌人が賞賛してきた貞淑な女性像に反することにつながる。つまり歌人の言葉が偽りであることが証明されてしまう。しかし、女性を称賛するほど、女性は神格化されていき、女性は男性の手の届かない存在となる。女性への称賛は、逆説的に歌人の苦しみを増大させるという自己矛盾を、高きミンネは抱えている。このように女性奉仕を行う男性は、外的・内的要因によって苦しむことになるのである。

しかしながらフェルデケは、愛＝ミンネのために苦しむ人は、ミンネを理解しており、それゆえに幸いであると述べている。

Swer ze der minne ist sô vruot,
daz er der minne dienen kan,
und er durch minne pîne tuot,
<wol im, derst ein saelic man!>

(男性)ミンネの奉仕をすることができ、/ ミンネのために苦しむほど、/ ミンネ

8) 「後朝の歌」(Tagelieder)と呼ばれるジャンルでは、男女の逢瀬と別離の悲しみが主題となる。また「後朝の歌」には属さないが、例えばヴァルターの L 39、11 では、逢瀬の喜びが女性の口を通して語られている。

のことをよく理解している者に、/ 祝福あれ、その者は幸福である。
(フェルデケ MF 61,33 第1節 1-4行)

無論、これは苦痛を礼賛するような、倒錯した世界観を述べているのではなく、「ミンネは心を清らかにする」(diu minne machet reinen muot)ものであり、ミンネのために苦悩に耐えようとする、女性奉仕を行う男性のあり方が描かれている。

そして女性もまた、男性がリートで称賛する女性像に呼応するかのようになり、己の名誉のために彼の求愛を拒み続け、苦しむことで、これまで得ていた社会的な名誉を守りながら、一途さ・誠実さを持つ婦人としての名誉をさらに高める。謂わばミンネザングでは、男女ともに愛に苦しむことが実質的な男女の名誉であったと言えるだろう。

一次文献

Bein, Thomas (Hrsg.): Walther von der Vogelweide. Leich, Lieder, Sangsprüche. 15., veränderte und um Fassungseditionen erweiterte Auflage der Ausgabe Karl Lachmanns. Berlin (De Gruyter) 2013.

Des Minnesangs Frühling. Unter Benutzung der Ausgaben von Karl Lachmann und Moriz Haupt, Friedrich Vogt und Carl von Kraus. Bearbeitet von Hugo Moser und Helmut Tervooren. I. Texte. 38., erneut revidierte Aufl. mit einem Anhang: Das Budapester und Kremsmünsterer Fragment. Stuttgart (Hirzel) 1988.

二次文献

Bennowitz, Ingrid: Das Paradoxon weiblichen Sprechens im Minnesang. In: Mediaevistik 4 (1991), S.21-36.

Hall, Clifton / Coleman, Samuel: Walther Von Der Vogelweide. A Complete Reference Work Head-Word and Rhyme-Word Concordances to His Poetry. Colorado. (University Press of Colorado) 1995.

Hall, Clifton: Head-Word and Rhyme-Word Concordances to Des Minnesangs Frühling. A Complete Reference Work. Technical Support by Samuel Coleman. Colorado. (University Press of Colorado) 1997.

Hausmann, Albrecht: Frauenlieder. In: Kellner, Beate / Reichlin, Susanne / Rudolph, Alexander (Hrsg.): Handbuch Minnesang. (de Gruyter) Berlin, 2021.

Kasten, Ingrid (Übers. und Hrsg.): Frauenlieder des Mittelalters. Zweisprachig. (Reclam) Stuttgart, 1990.

Kasten, Ingrid (Edition der Texte und Komm.) / Kuhn, Margherita (Übers.): Deutsche Lyrik des frühen und hohen Mittelalters. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker)

1995.

Schweikle, Günther: *Mittelhochdeutsche Minnelyrik. I. Frühe Minnelyrik.* (Metzler) Stuttgart-Weimar, 1993.

Schweikle, Günther (Hrsg., Übers. und Komm.): *Walther von der Vogelweide. Werke. Gesamtausgabe.* Bd.1. Spruchlyrik. 1944. Bd.2. Liedlyrik. *Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch.* Stuttgart (Reclam) 1998.

ヴェルナー・ホフマン、岸谷徹子、石井道子、柳井尚子 訳著: *ミンネザング ドイツ中世恋愛抒情詩選集* (大学書林) 2001 年.

エーディト・エンネン(安部謹也 / 泉眞樹子訳) *西洋中世の女たち* (人文書院) 1992 年.
高津春久編訳: *ミンネザング* (郁文堂) 1978 年.

イゾルデの名誉と愛

——トリスタンの刀の欠損部分の意味と媚薬の役割——

渡邊 徳明

1. トリスタンを殺さないのは名誉のためなのか？（問題提起）——3つのコード

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクが1210年頃に書いたとされる『トリスタン』において、おそらくクライマックスはアイルランドのイゾルデ姫が、入浴中のトリスタンに対して刀を振り上げる場面であろう [Tr.10143-10145]。(この物語でアイルランドのイゾルデは母娘の二人いるが、娘のイゾルデを明示するため、本稿では必要に応じて「イゾルデ姫」とも記す。) イゾルデは意思を持って刀を振り上げ、しかし意思を持ってトリスタンを斬ることを思いとどまる。人物の自発的な意思による決断は、この中世を代表する恋愛物語の「近代性」をよく表している。つまり、運命を受け入れるか抗うかのいずれかはさておき、その責任を個人が負うという意味においてである。(後の媚薬を飲む場面ももちろん重要な転回点であるが、それはトリスタンとイゾルデの意思によるのではなく、過失で飲むのであり、本人の決断は絡まない。この「媚薬」をワーグナーの歌劇では、二人が意思を持って飲む。)

もし姫であるイゾルデがトリスタンに刀を振り下ろしていたら、彼女はこうなっていただろう。

トリスタンは「タントリス」という偽名を使ってアイルランドの王家に近づいたのであり、仮に王宮にて殺されていたとしても、それはトリスタンが殺されたのではなく楽人タントリスが殺されたということになっただろう。

そのようなことをすれば、イゾルデ自身の名誉が傷つく、という議論が母娘と侍女の間でなされる。イゾルデの名誉 (Ehre, mhd. êre) とは何なのであろうか。それを論じるのが本稿の目的である¹⁾。

本稿では、宮廷叙事詩の貴婦人の社会的な名誉を論じる。それは、宮廷騎士社会の階級に応じて与えられる個々の人物の役割や振る舞いのコードに照らして、ある行動がふさわしいのか、そうでないのか、という議論になる。中世の騎士社会においては慣例化した身振りやしきたりが現代よりも重要視された。そこにはその社会の成員が共有する

1) 『トリスタン』における êre の性質について、以下を参照。Maurer, S. 245ff.

常識や相場観が確かに存在し、それによって成員同士の行動の是非が評価され、またメッセージが読み取られた。

イゾルデが「タントリス」を殺したら、その風聞はすぐに宮廷のみならず国内、諸国にまで広がっていくのだろう。中世文学では個人の領域と公の領域の境が明確ではない。あるいは個人の領域は、しばしば集団によって共有される²⁾。もっとも H・ヴェンツェルは『トリスタン』において様々な宮廷の秘密が守られ、世の人々が知らずにいることが前提とされて物語が進むと指摘する³⁾。共有された秘密が当事者だけで封印されることにこそ、『トリスタン』の作品としての特徴があるとも言える⁴⁾。特定の人々にしか分からない明文化されぬルールこそコードと言えよう。『トリスタン』にはコードが張り巡らされている。

上記の場面に関して言えば、宮廷貴婦人であるイゾルデ姫を巡っては、

1. 宮廷的作法のコード (コード1)
2. 宮廷社会の序列をめぐるコード (コード2)
3. 内面的な愛のコード (コード3)

の三つの価値体系が交錯していると筆者は考え、それを前提に以下の考察を進む。これらのコードは、同一作品の中での異なる記述、あるいは同時代に読まれたり、同じジャンルに属する複数の作品が、互いに間テクスト的な関係の中でベースとして共有している不文律もしくは相場である。

媚薬を飲む前のトリスタンとイゾルデの間の感情は直接的な言葉で表現される訳ではなく、身振りや行動にほのめかされるのみである。その捉えがたい感情は、やがて愛に発展してゆくことになるが、それは本来は、友情とも愛情ともつかぬ、宮廷的なたしなみを守った静かなものである。このような捉えがたい愛の様態を間接的に読み取らせる宮廷的な社交のコード (social code) の系譜については、多くのトリスタン研究で知られる R.シュネル (2003)⁵⁾が論じている。

閉ざされたテキストの意味連関と受容者が共有する認識というテキストの「内と外」の関係、更には、登場人物の内面世界がどれほどのレベルで物語内の多くの人たちによって共有されているのか、という人物の心の「内と外」の関係、が以下の議論では問題

2) Müller, 2007, S. 305ff.

3) Wenzel, 1988, S. 342.

4) Wenzel は 12 世紀に深化した罪と名誉の内面化についても言及している。「明るい」表の社会の決まりに逆らう形はとらぬものの、密かに想いを貫く「暗闇の」愛についての名誉のイメージが広がっていったという。その際、イゾルデの秘められた愛への想いをエロイーズがアベラールに抱いた愛と比較して論じている。(Wenzel, 1988, S. 352f.)

5) とりわけ明確に social code という語を使っている箇所としては以下を参照。Schnell, 2003, S. 111.

となってくる。「名誉」は意味づけによって決められる相対的なものであるが、トリスタンとイゾルデの振る舞いが、社会的な基準で名誉にかなうものであるのか、それとも、自分自身あるいは自分と恋人だけの秘密の領域において価値づけられるのか、が問題となる。

とりわけ『トリスタン』は世間の価値基準とは別の自分たちのみ信ずる愛の論理を優先する物語である。ただし、トリスタンとイゾルデは同時にミュラーの指摘するように、宮廷文化そのものを体現する優雅な存在であり⁶⁾、彼らの身体的行動は個人的なそれであっても宮廷的作法を体現し（上記のコード1に関わる）、「内面」（上記のコード3に関わる）すらも完全に自分だけのものではなく、宮廷的作法と表裏でもある。

2. イゾルデ母娘と侍女ブランゲーネの議論 —— 宮廷的作法（コード1）

イゾルデ姫の母親もまたイゾルデという同名であり、この二人は実際に精神的な結びつきも強い。二人の名誉はトリスタンによって著しく傷つけられた。国の誇りを支えていたモーロルト公を殺したのはこのトリスタンであり、モーロルト公は母イゾルデの弟、娘のイゾルデ姫の伯父であった。

この母娘の名誉は回復されねばならない。宮廷叙事詩の世界においては、婦人の名誉は全体的な意味を持っていたからである。すなわち、美しさも、内面的な気高さも、社会的な地位と連動していた⁷⁾。生前のモーロルトはコンウォールの国を脅し、服従を強いていた。それを拒否し、決闘を挑んで彼を殺したのがトリスタンである。国の名誉と共に貴婦人としての名誉も、モーロルトの死によって傷つけられた。

そして、楽人としてのトリスタン（＝「タントリス」）がいま、手負いの状態で、しかも入浴中で寸鉄も身に帯びずにイゾルデ姫の目の前にいる。彼女は今にも彼を切り殺そうとする。イゾルデは自分に次のように言い聞かせる [Tr.10133-10142]。なお、引用中の下線は本稿の筆者による。（以下同様）

wer hæte ouch diz getân wan er,/daz er von Curnewâle her/ ze sînen tôtvînden vert/
und wir in zwirnt haben ernert!/ernert? er'st nu vil ungenesen./diz swert daz muoz
sîn ende wesen!/ Nu île, rich dîn leit, Îsôt!/ gelît er von dem swerte tô,t,/ dâ mite er
dînen œheim sluoc,/ sô ist der räche genuoc!

あの人以外にいったい誰がしただろう。コンウォールの地から自分の仇敵のところまで旅してきて、そして私たちに二度も体を治してもらったなんて。治してもらった？あの人はいま、命の瀬戸際だわ。この刀があの人に終止符を打つのだわ。さあ急ぎなさい、自分の苦しみの仕返しをするの、イゾルデ！あの人がこの刀で死んだ

6) Müller, 2007, S. 437f.

7) Schulze, 1997, S. 143.

なら、それは伯父様を切り殺した刀なのだから、復讐には何よりだわ。

それに対して、トリスタンは、自分を殺せばイゾルデ自身の名誉が失われる、と忠告する [Tr.10158-10160]。そして、母イゾルデもまたトリスタンを殺せば信用と名誉を失うと反対する [Tr.10208-10211]。

ez'n stât nu leider niht alsô, /daz wir uns mügen gerechen,/ wir'n wellen danne brechen/ unser triuwe und unser êre.

いまや残念ながら、私たちが復讐できる状況ではないのです、信用と名誉を失うことも厭わない限り。

もともと、娘イゾルデの話を聞いた母イゾルデは、やはりトリスタンに仕返ししなければ、王家の名誉が失われるという意見に転ずる [Tr.10302-10309]。

mîn dinc daz stât mir iezuo sô/ umbe den unsæligen man,/ der uns mit kampfê sprichet an:/ wir'n sehen genôte dar zuo,/dîn vater der künec, ich unde duo/ wir haben iemer mêre/ verloren unser êre/ und enwerden niemer mêre vrô.

私たちに戦いを仕掛けたこの悪い男を、私はこう思うのです。私たちがこのことを真剣に受け止めねば、あなたの父である王も、私も、あなたも、私たちずっと名誉を失い、ずっと浮かばれることはないのです。

結局、侍女のブランゲーネが止めに入った。やはりイゾルデ母娘の名誉が傷つく、というのである [Tr.10400-10404]。

ouch sult ir des gedenken wol,/ waz rede iuch mit im an gât,/ diu niuwan umb iuwer êre stât./ soltet ir iuwer êre geben/ umb keines iuwers vîndes leben?

またどうぞお考え下さい。あの方のことで、貴女様はどんな話になるのかを、それは貴女様の名誉のことに他なりません。貴女様の敵の命と引き換えに、ご自分の名誉を手放すべきではないのでは？

それどころかブランゲーネはトリスタンがイゾルデ母娘に名誉をもたらす意図があるのでは、と指摘する [Tr.10424-10427]。

sîn muot ist lîhte vil guot/ hin z'iuwer beider êren./ man sol den mantel kêren,/ als ie die winde sind gewant.

あの方の心は恐らく好意的で、貴方様お二人の名誉に寄与するでしょう。マントの

向きを変えましょう。風向きに合わせながら。

このようなイゾルデ母娘、トリスタン、侍女ブランゲーネの会話から、いったい何がイゾルデ母娘にとって名誉であるのかについて、当事者の間でも決着つかずにある、ということが作品から読み取れる。それはつまり、イゾルデ母娘が宮廷人としてどのような存在として位置づけられるのが名誉とされ、どのような境遇に陥ることが名誉の欠損となるのかが不明瞭であることを示している。

ここで議論されている名誉とは、あくまで社会的な文脈の中での外部的評価が拠り所となる。つまりここでは宮廷社会の秩序によって成り立つ価値なのである。中世宮廷文学において leit (苦しみ) とは名誉を失うことに由来する、というのが F・マウラーの有名な説である⁸⁾。そしてそれは『トリスタン』についても当てはまるという。

それに対して、ゴットフリートの『トリスタン』が描く愛は、社会的な名誉と関わるような愛ではなく、もっと心の奥に隠れて見えない内面的な愛 (ラインマル的な愛) であるのだ、と H.デ・ボーアは考える⁹⁾。トリスタンとイゾルデの間の愛は、確かに二人が媚薬を飲む前の段階では周囲はおろか、本人たち自身すら気づいていなかったのではないか、と筆者も考え、以後の論述を進める。(つまり媚薬は隠れていた愛を顕在化させただけであり、媚薬を飲む以前から二人は愛し合っていた、と考えるのが、ゴットフリートの『トリスタン』についての解釈の主流である。もっともバランドゥン[2009]は、媚薬は忘れ薬の役割をも果たし、トリスタンとイゾルデの間の敵対意識を忘れさせ、二人の間の愛の支障を取り除いた、と指摘する¹⁰⁾。)

3. トリスタンとイゾルデは既に愛し合っていたのではないのか? ——宮廷的作法(コード1)あるいは内面的な愛(コード3)

トリスタンはモーロルトによって切り付けられたのがもとで、ひどい傷に苦しんでいた。刀に塗られていた毒により、全身が炎症によって腐臭を放ち、その治療を施せるのはモーロルトの妹であるイゾルデのみであった。すなわち母イゾルデのことである。それで密かにアイルランドを訪れたトリスタン (Tristan) は「タントリス (Tantris)」と偽名を用いた。

音楽の才に恵まれ、諸外国語にも堪能な、奇跡的な天才ともいえる若者を、イゾルデ母娘はほとんど愛した。すくなくとも才能は愛した。このとき「タントリス」は全身を侵した毒のために顔貌も醜くなり、王家の母娘が親愛の情を向ける対象にはおよそなりにくかった。タントリス (=トリスタン) は宮廷でイゾルデ母娘による看病を受けながら回復してゆくとともに、娘のイゾルデ姫に対して、音楽、外国語、宮廷的作法を教え

8) 『トリスタン』における leit の問題については、以下を参照 Maurer, S. 231ff.

9) Helmut de Boor, 1940, S. 281. この論文について、以下を参照。Maurer, S. 207.

10) Barandun, S. 170f.

る家庭教師となる。そこで天才性を発揮する彼に、姫は彼に対して想いを募らせていった。

しかし「タントリス」は、体と顔貌が回復するにつれて、自分の身分が明らかになることを恐れるようになる。なぜならこの母娘の親類であるモーロルトを殺したのは紛れもなく彼に他ならないからである。それで「タントリス」はアイルランドから離れる。

このとき、娘イゾルデは「タントリス」に対して愛情を抱いていたのだろうか。そもそも、宮廷騎士文学において、貴族が身分の釣り合わぬ相手に愛情を抱くことはほぼ無い。イゾルデ姫と「タントリス」の関係も、宮廷的教養を共有する間柄として惹き合うレベルの感情と理解すべきである、と述べているのはJ-D・ミュラーである¹¹⁾。ミュラーの著書『宮廷的妥協の数々』(Höfische Kompromisse, 2007)が2010年代の中高ドイツ語宮廷叙事詩の解釈についての議論の土台を提供したと言えるが、ミュラーは、トリスタンとイゾルデの愛が社会性を振り捨てた、過度に内面化された性質のものではないと考える¹²⁾。

もっとも、そのような控えめな解釈では物足りないのも当然だろう。二人の間の愛が偶然ではなく必然であると捉えるならば、既に最初の時から愛があったのではないかと読みたくなるだろう。そして実際、この叙事詩の魅力はそこにある。

次にトリスタンが、イゾルデをマルケ王の妃として迎えるために、再び「タントリス」と名を偽り、アイルランドに潜入して竜との闘いに負傷し、宮廷に保護されイゾルデが刀を振り上げた(本論の冒頭で紹介した)場面へと戻ってみたい。彼女がトリスタンを斬り殺そうとしながらできなかったのは、「甘やかな女らしさ」(diu süeze Wipheit [Tr.10265])のためであるが、それはやはり愛なのだろうか。この部分は「女性性」を考える上でも重要な場面である。

「女性らしさ」があれば人を斬り殺そうとはしないのだろうか。

「女性らしさ」という点で、同時代の叙事詩を思い出してみよう。たとえばヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』のヘルツェロイデは、自分の息子を騎士の戦いの世界から無縁であるように育てるために森の中に引き籠る [Parz. 117,8]。またこの叙事詩では、貴婦人ジグーネが自らの恋人シーアーナトゥランダーの死を悼んで悲しみ続ける様子が描かれる [Parz.138,11]。

しかし『ニーベルンゲンの歌』のプリュンヒルトとクリエムヒルトはどうだろう。プリュンヒルトは自分と力比べをして負けた求婚者を殺してしまうし [NL. 338 節

11) Müller, 2007, S. 437.

12) ミュラーの研究(Müller, 2007)は、基本的には様々な宮廷文学叙事詩をテキスト横断的・総括的に比較して、宮廷文学叙事詩のジャンル内で形成された文学世界のメンタリティーの基本パターンを再現しようと試みた。それで、個々の作品の解釈にさほどまでに深入りした訳ではない。つまり、登場人物の内面を読み取り、その人物が作品内の時間的な経過の中で成長したり、愛を共有し、その思い出に縛られたり、という作品内の筋読みを積極的に行う訳でもないし、また感情的な記憶の重層的な発展を論ずる訳でもない。

(Bartsch/De Boor 版による詩節) = NL. 340 節 (B 写本)]、クリエムヒルトは自分の夫であるジーフリトを殺したハゲネを最後に斬り殺す [NL. 2373 節 (Bartsch/De Boor 版による詩節) = NL. 2370 節 (B 写本)]。このように見るならば、「女性らしさ」が必ずしも情け深いということにはならないかもしれない。

イゾルデにしても、自分とトリスタンとの禁断の恋を知っている侍女ブランゲーネを殺そうと企んだのであり、決して情け深いとは言い難い。つまりイゾルデは必ずしも「優しい」女性ではない。

そのように考えるなら、「甘やかな女性らしさ」ゆえにトリスタンを斬り殺せなかった、というのは、単に「優しい」からではなく、トリスタンに既に特別な愛情を抱いていたから、と理解する方が正しい。

また名誉を保つためにトリスタンを殺さずにおこななかった、というのもあくまで表面的な理由である。つまりそれはブランゲーネの入れ知恵に過ぎず¹³⁾、それが無くてもイゾルデは最初からトリスタンに恋をしているから殺すことはできない。そして、ブランゲーネはそのようなイゾルデの心を見抜き、敢えて心の中に隠されたイゾルデのトリスタンへの愛を実現させるべく、侍女としての役割を果たす。ブランゲーネのイゾルデへの献身と立ち回りは、聡明で主人の「心」に忠実な侍女のそれである。

彼らの愛は確かに存在し、隠されてもいるが、宮廷の皆に知られてゆく。そして、本人たちもその愛の理由を説明できないままに、身を任せてしまう。イゾルデとトリスタンとの間には、明確な愛の約束がある訳ではない。愛の告白がある訳でもなく、むしろ「苦しみ」としての愛の共有、それを二人が互いに確信していることが愛の証となっている。

三十年ほど先行して 1180 年代にフェルデケによって書かれていた『エネアス物語』とは確かにそこが違っている。エネアスとデイドーは、愛の女神ヴェーヌスの業により恋に落ちた [Eneasroman: 48,8 (=1234 行)]。トリスタンとイゾルデの場合は、愛の始まりが明確ではない。知らない間に始まってしまう。媚薬を飲んだ以前に既に二人の間には愛が生じていた。

初めてトリスタンがイゾルデと会って、看病されながら彼女に音楽や外国語、作法を教師として教えていたとき、二人の間には既に好意以上のものが存在していた。しかし彼は彼女の伯父を殺したその人であり、それが露見すれば命の危険がある。美しい元の姿に戻り彼女が彼のことをますます好意的に思うほど、死の危険は近づく。彼は彼女の元を去った。

それで、二度目にトリスタンが敢えてイゾルデに会いに来ることは矛盾とも見えてくる。依然として彼の正体が露見して殺される危険があるのだから。トリスタンは敢えて

13) ブランゲーネの役割については、Deutscher Klassiker Verlag のテキスト第 2 巻の W. Haug のコメント [Tr.10387-10404 および 10420-10458] を参照 (S. 498f.)。

マルケ王の妃にするためにイゾルデ姫を迎えに来る¹⁴⁾。

自分を殺す可能性が高いイゾルデと今後も会うためには、彼女との和解が必要であり、マルケ王の妃という地位を提供することは手土産になる。始めからイゾルデとの関係は秘められた恋となることが定まっている。

トリスタンは、制度化された婚姻制度の裏側を始めから通って行く。そこが、名高い貴婦人であるクリエムヒルトを妻とするためにわざわざ遠方から旅をしてくる『ニーベルングンの歌』のジーフリトとの大きな違いである。あるいは、エーニーテの名誉のために馬上槍試合を行うエーレクの姿勢とも異なる。

自分の両親がそうであったように、トリスタンは宮廷社会に対してひっそりと背を向けた男女関係を営み、夫婦生活を楽しむ暇もない。(トリスタンはやがて遠国において「白い手のイゾルデ」と結婚するが、しかし「夫婦生活」を営むことはない。もっとも『トリスタン』については世俗的な価値を超越する、神秘主義的とも言える宗教性(カタリ派的な性格)を指摘する声も強く、アンチ婚姻とまでは言えないまでも、そのような社会的倫理基準に捉われない思想性があったとも言える¹⁵⁾。)

4. アイルランドとコンウォールの王家の格と宗教的土壌の違い —— 宮廷社会の序列 (コード2)

前述のように侍女ブランゲーネは一貫して二人の関係の深化・継続を後押ししてゆく¹⁶⁾。ブランゲーネは主人の名誉を重んじる賢女の役回りであるが、イゾルデとトリスタンの恋を「後押し」することも、主人の「名誉」という点では合理的な理由付けができるのだろうか。

彼女はイゾルデ母娘の親類筋であり [Tr.9421 では母イゾルデがブランゲーネを *höfschiu niftel* (宮廷貴婦人である姪) と呼んでいる]、既に一貫して王家の名誉を顧慮していることを考えれば、その言動・行動はより政治的な動機から為された冷静なもの

14) これについて Ralf Simon は、妖精のメルヘンの伝統がベースとして取り込まれている、と外在的な物語要素から、トリスタンの行動を説明している(S. 368.)。

15) カタリ派の影響については以下を参照。G.Weber und W.Hoffmann, S. 84f. また Rüdiger Schnell (1982) によれば、ゴットフリートは『トリスタン』で、主人公の父リヴァリーンと母ブランシェフルールについて、教会を通した結婚の前の二人の間の愛は、未婚だからといって価値が低いという訳ではなく、他方、その後に二人が正式に結婚したからといって、その愛の価値が相対的に低められた訳でもないという。Schnell は『トリスタン』において、個人的なミネ(愛)と婚姻は互いに独立してパラレルな関係と見ている。(S. 344.)

16) W.Haug のコメント(S. 515, [Tr.11645-11685, 11648-11688]) を参照。「過失」によって媚薬を飲むことになった経緯は多分に偶然だが、しかしその場に居なかったブランゲーネが、(二人が媚薬を飲んでしまった後に) すぐにその場に現れることの不自然さを指摘する意見にも言及している。ブランゲーネが意図的に二人が媚薬を飲むことを黙認したという解釈が妥当かどうかについての言及はないが。

であるとも推測できる。まず、イゾルデ姫がマルケ王と結ばれることが、大きな視野で見てもアイルランドの王家の家格を下げないかどうか、という点について考えてみたい。

アイルランドの王家とコンウォールの王家の間の家柄の上下については、明確な秩序の中で比較するのが難しい。というのも、イゾルデの父であるグルムーン王はアフリカの王家出身で [Tr.5879-5884]、武力によってアイルランドの支配権を獲得し、更に、マルケ王に朝貢を要求できたのは、その武力によるものであり、まだマルケ王が若すぎて抗し得なかったからである [Tr.5927-5930]。つまり、アイルランド王家は宮廷社会の秩序の中でコンウォール王家より上位とは言い切れない。

もっとも、コンウォールの宮廷で重臣たちがマルケ王の妃候補としてイゾルデ姫を提案したときに、血筋や心映え、姿も妃にふさわしいと述べており [Tr.8454-8457]、他方、タントリスと名乗ったトリスタンがイゾルデ姫に対し、マルケ王の妃になることを提案するときも、アイルランド王家の側から家柄的にコンウォールの王家の格が低いという意見は出ない。

物語において、トリスタンはマルケ王の妃にするはずのイゾルデと船上で結ばれてしまう。ブランゲーネはアイルランドの王族に対して忠実であるのと同時に、主人イゾルデの（トリスタンに対する）恋心にも忠実に行動してしまう。イゾルデのトリスタンに対する想いを察したブランゲーネが、トリスタンとイゾルデが共に媚薬を飲む機会を「過失」という形で作ってしまう。いまや、この物語は、教会の支配の下に制度化された婚姻による夫婦関係と、そのような制度的な枠組みで神に婚姻の誓いを立てなかった恋人関係との対立が描かれる。

一見するとコンウォールにおけるマルケ王との教会での婚姻が、トリスタンとイゾルデとの間の愛に比して圧倒的に正当性を有するようではある¹⁷⁾。しかし、マルケ王の権威はコンウォールの国の中だけの話であり、また、トリスタンはマルケ王の甥で王族であるのだから、身分的な点でアイルランドに赴きイゾルデ姫と結婚する権利はあったはずである¹⁸⁾。それに、「不倫」(Ehebruch) は社会通念上は許されないものかも知れないが、トリスタンとイゾルデが媚薬を飲んで結ばれるのは、イゾルデがマルケ王と結婚する前の船の上での話であり、その点で「不倫」にはならない。そして、その後も「不倫」が続いてしまうのは、媚薬のせいであるとも弁明できる。(ただし、それは内面的な Tristanminne のコンセプトとは矛盾してしまうが。)

イゾルデ姫はマルケ王とトリスタンの両方と男女の関係を結んでゆくのであるが、そもそも前述のように父であるアイルランド王グルムーンはアフリカの王家の出で、キリ

17) マルケ王とイゾルデの結婚の法律上(教会法上)の正当性と、(物語のコンセプトから見た)内面的な視点からの不当性については、以下を参照。Ralf Simon, S. 359f.

18) トリスタンとイゾルデの「結婚」の正当性の議論と微妙さについて、以下を参照。Brandun, S. 94.

スト教徒であるのか怪しい¹⁹⁾。「結婚」はキリスト教会の秘蹟であるからこそ拘束力があるが、アイルランド王家がその点を重視するか不明である。(もしイゾルデがアイルランド王家の一員というアイデンティティーを持ち続けて生きるなら、アイルランド国内を荒らした竜を倒し、貴族の身分であるトリスタンの妻になることは、国王の声明 [Tr.8911-8913] にもかなう。)

そのような宗教的な拘束を度外視して、宮廷の論理(つまり身分の上下)のみから、イゾルデ姫がトリスタンと結ばれることが「名誉」であるのか「不名誉」であるのかを考えてみよう。

5. トリスタンの出生と身分に関する疑念 — 宮廷社会の序列(コード2)と宮廷的作法(コード1)

イゾルデ姫はマルケ王とトリスタンのどちらと結婚すれば、より高い身分を保てるのだろうか。

マルケ王とトリスタンの身分、家格に違いはないのか。騎士社会での階級を厳密に考えてみると、トリスタンの父親であるリヴァリーンはバルメニエの領主で、王族の血筋であるが [Tr.249]、マルケ王と同格と言えるのかどうか。リヴァリーンはマルケ王の妹であるブランシェフルールと結ばれるが、コンウォールの国内で彼女が妊娠し、二人で密かにリヴァリーンの領国に逃れてから挙式を行う。つまり、コンウォールの国内で、正式にマルケ王の妹と結婚したわけではない。そのことから、リヴァリーンがマルケ王と血筋的に同格ではなく、格下だったから秘めた恋にならざるを得なかったのではないか、とも思えてくる²⁰⁾。トリスタンがマルケ王の宮廷で無理をしてモーロルトと戦う

19) Rüdiger Schnell(1982)は、グルムーンが王妃イゾルデと結婚したのは彼女がキリスト教徒だからではなく、herzevrouwe(心から愛する貴婦人)だからである、と指摘し、このherzevrouweの語が、トリスタンがイゾルデに呼びかける際に用いられていることを重視する(S.349f.)。つまりSchnellは、教会の介在しない自律的な愛が、父グルムーンと母イゾルデ王妃の間と同様に、トリスタンとイゾルデ姫の間にも引き継がれていると見るのだろう。

20) リヴァリーンは(正式な結婚を経なかったが)ブランシェフルールと結ばれて著しく名誉を高めたと重臣のルアールが喜び [Tr.1613-1619]、同時にルアールは、リヴァリーンにそれに乗じてブランシェフルールと正式に結婚すべきと勧めたことに、Schnellは言及している(a.a.O., S.341f.)。本論の趣旨に照らして言えば、このことは、ブランシェフルールの血筋(=マルケ王の血筋)が高いことを示すものとも言えよう。Schnellはルアールが敢えて、二人を正式に結婚させるのは当時(13世紀初頭)の仏・伊で通用していた(そして英・独ではまだ受け入れられなかった)教会法解釈に従い、これから生まれる子(=後のトリスタン)が仮に父(リヴァリーン)が戦死しても、妊娠後の結婚申請により、教会法に従い財を相続できるようにするための布石であったと推測する。Schnellはこの結婚により初めてリヴァリーンとブランシェフルールの「愛」が正当化された、という考えではない。二人の愛は結婚制度とは関係なく自律的である、というのが彼の立場である。しかし、ゴットフリートはこの二人にとって結婚に子の相続に関するメリットがあったとも考えたのだろうとSchnellは指摘する。(a.a.O., S.344.)

ことを引き受けたり、マルケ王の嫁探しを引き受けたりすることの一つの理由として、トリスタン自身の地位の確立のために、自分の家筋についての不明瞭さを補うほどの手柄が必要という意識があったと解釈できるのではないか。

同じことはトリスタンとイゾルデが男女として結びつくための「釣り合い」を成立させる点で重要になる。つまり、だからこそトリスタンが二度目にアイルランドに来たときに、竜退治のストーリーが組み入れられているのだろう [Tr.8925-9063]。この竜退治をすることで彼の評価が更に加点されることになる。(しかも、この竜を退治した者はもし貴族である騎士ならば姫と結婚してよい、と父のアイルランド王が宣言もしている [Tr.8911-8913].)

この部分は、『ニーベルンゲンの歌』のジーフリトが竜退治をする事情と似ている。ある伝承では父ジグムントが戦死する前にヴァルキューレの一人に身籠らせたともされ、またある伝承では王ジグムントによって養育係とされた刀鍛冶レギンに育てられ(その唆しによって竜を退治するとも伝わるが)、このようにジーフリトの出自にはある種の怪しさが付きまとい²¹⁾、宮廷騎士社会における身分の不明瞭さを埋め合わせる、英雄としての活躍の誇示が、物語のバランスを維持する。クリエムヒルトとの結婚が実現するのが、ザクセン族との戦いで大活躍をし、アイスランドでブリュンヒルトを屈服させてグンテルとの結婚を承服させ、更にニーベルンゲン族を討伐した後である、ということもその読み筋を裏付ける。

そのような同時代の宮廷文学受容の場における共通認識を踏まえて、トリスタンの身分も当時の読者たちによって値踏みされたのであろう。(『ニーベルンゲンの歌』も『トリスタン』も13世紀の最初の十年に書かれたとされる。)トリスタンも竜を退治し、そしてイゾルデ母娘によって再び手厚い看護を受ける [Tr.9983-9991]。特に母娘が毛嫌いする内膳頭が自分こそ竜を退治したと虚言を述べてイゾルデ姫を妻にしようと必死であったので、その目論見を失敗させたトリスタンは尚更のこと、母娘の好意の的となった。そして姫は、彼のような素晴らしい者が領主でなく富にも名誉にも恵まれないのは不当である、と、残念がる [Tr.10009-10032]。もっとも依然として「楽人タントリス」という立場では、イゾルデが愛を向ける対象とはなりにくい。しかし、その前提が崩れる事態が起きる。

イゾルデは入浴中のタントリス (=トリスタン) の刀を鞘から抜いて、刃を眺める。関心を持つ男性の持ち物を愛しむかのような気持ちからである。ところがそのときに、彼の刀に刃こぼれを見つけ、すぐさま事態を悟る。「タントリス」こそ「トリスタン」だ、伯父モーロルトを殺した男だ、と²²⁾。

21) 一般読者向けのもの(つまり専門の学術書ではない)であるが Tetzner (2011) がゲルマン神話について再話したレクラム文庫の読本を参照した。父ジグムントの子として生まれた経緯について S. 140ff.、レギンについて S. 154ff. を参照。

22) W.Haug のコメント [10092-10122] 参照。刀の破片のみならず、「タントリス」という偽

すぐさまイゾルデは「トリスタン」のもとに歩み寄り、詰問する。そして刀を振り上げる。

しかし、本稿の第2節で記したように、結局はブランゲーネの意見に従い自らの「名誉」を重んじるという理由で、トリスタンを殺すことを思いとどまる。たしかに、それで「名誉」は保たれたのかもしれないが、イゾルデの内面では、おそらく別の動きがあった。

その別の動きこそ「愛」の予感である。既に彼の正体が露見する前から、イゾルデは「タントリス」という人物に好意を抱いていた。そして、前述のように彼の身分ゆえの不遇を不当なものとして嘆いていた [Tr.10009-10032]。

ところが「タントリス」はまさにコンウォールの王族のトリスタンであることが刀の刃こぼれによって判明した。少なくとも、身分的にトリスタンはイゾルデ姫と釣り合う。トリスタンは仇敵であり、殺さねばならない相手であるが、自ら自分たちの懐に入り込み庇護を約束され、しかも竜を倒し、国とイゾルデ自らの安心と名誉を取り戻してくれた功績がある。まして、ブランゲーネは、このトリスタンが使者として自らに新たな「名誉」をもたらそうとしているのかもしれない、と進言している [Tr.10424-10429]。このときイゾルデの前に、トリスタンの妻となることが現実味を帯びてくる。しかし、その隠れた期待は肩透かしを食ってしまう。

トリスタンの提案により、イゾルデはコンウォールのマルケ王のもとに輿入れすることになる。それははるかに年上の、愛を感じることも難しいであろう男性である。この政略結婚を母イゾルデは不憫に思ったか。もっともそのような憐憫が表現されぬのは、中世の叙事詩に描かれる王族のドライな部分である。宮廷の名誉と財が重視されたリアル・ポリティクスの世界そのものである。つまり、イゾルデ姫が上手くマルケ王を籠絡できれば、その国を事実上コントロールすることも可能なのである。そのとき役立つのが母がブランゲーネに持たせてくれた媚薬のはずであった。

この媚薬を飲むことは、イゾルデ母娘にどのような名誉をもたらすことになるのか。以下の最終節でそれを考えるが、婦人の心の中での名誉は、やはり一様に定められないことが分かるだろう。どのコードによってそれを価値づけるか。そしてそれは世間という外部に接続する価値なのか、それとも自分や恋人との内面においてのみ価値づけるべきものなのかは、定かでない。

6. 媚薬と名誉と愛（むすび）——宮廷社会の序列（コード2）と内面的な愛（コード3）

トリスタンの刀の刃こぼれにより、彼はいろいろな意味でイゾルデ姫と釣り合う関係であることが分かったが、同時にそれは二人の敵対関係をも明らかにしてしまった。そ

名の謎が解き明かされたことが、トリスタンが仇であることの確信の決め手となったと主張している。Tristan und Isolde. Bd.2. 2011, S.495.

の敵対関係は国レベル・外交レベルの話でもある。母イゾルデが娘に持たせた媚薬は、その敵対関係を巡って、失われた名誉を巡って、彼女が復讐するための道具にもなり、同時にその名誉へのこだわりを乗り越え、イゾルデ姫を苦しみから解放し、否、むしろ新たな恋の苦しみに引きずり込むスイッチにもなる。その過程を以下に説明し、本稿の「むすび」としよう。

マルケ王は、イゾルデが嫁ぐとしても身分的に釣り合う相手である。そして、その国の運営の舵をイゾルデが操ることができれば、アイルランドとしても都合が良い。このマルケ王とイゾルデの結婚は紛れもない外交戦である。この外交戦はモーロルトが生きていた頃から続いている、アイルランドとコンウォールの名誉をかけた戦いの一部である。（『ニーベルンゲンの歌』においても、フン族のエツツェル王に後妻として嫁いだブルグント族のクリエムヒルトは、その後にエツツェル王を籠絡して [NL.1400 詩節 (Bartsch/De Boor 版による詩節) = NL.1397 節 (B 写本)]、殺された前夫ジーフリトの仇を討つために、身内であるブルグント王族と家臣のハゲネらを招待する。妃の女性的な魅力は政治的実権を握る王を操る武器である。）

またイゾルデ姫が国内で廷臣である内膳頭と結婚するよりも、コンウォールのマルケ王と結婚する方が、王家の血筋の尊厳化が強まることは疑い得ない。このようなことを考えるならば、使者であるトリスタンを生かし、マルケ王の妃となることはイゾルデ姫とその親のアイルランド国王夫妻にとって理にかなった判断となる。王家と姫自身の名誉を維持し、高めるためである。

しかし、結果的に媚薬は別の形でアイルランド王家とコンウォール王家の名誉を巡る駆け引きに作用することになる。イゾルデはコンウォール宮廷における王妃としての地位を得ながら、媚薬を飲んだ相手すなわちトリスタンと愛し合ってしまう、その結果として、国と教会によって権威付けられたマルケ王との結婚の価値を相対化してしまう。

このような結果を母イゾルデが想定しているのかは定かでないのだが、娘のイゾルデ姫が媚薬を飲んでマルケ王とではなくトリスタンとの愛を実行してしまうことは、アイルランド王家によるコンウォール王家に対する一つの復讐であるとも読めるように筆者は思う。イゾルデ姫はコンウォール王家に嫁いだ後も、故郷の父王の言葉の通りに行動してしまう。つまり、竜を退治した貴族である騎士と結ばれるのである。なにしろ、若く美しい姫を老いた未婚の国王に嫁がせねばならないことは、アイルランドにいる彼女の両親にとって屈辱ではなかったか。（そのような考えが表明される訳ではないが、しかし、『トリスタン』に描かれる主人公の実父リヴァリーンと実母ブランシェフルールの熱烈な純愛を見た後では、若く美しき姫イゾルデを、敢えて老いたマルケ王に差し出さねばならぬことは、恋人同士 of 二人の内面の自由を尊重する Tristanminne に照らして、物語のコンセプト上、許容できる話ではない。）

この媚薬に関して、更に宮廷的な愛の文脈での名誉という観点で考察してみたい。トリスタン自身は船上で媚薬を飲んでイゾルデと離れられなくなってしまった後に、以下

の引用にあるように自分の騎士としての名誉が失われることを恐れる。[Tr.11741-11744]

Tristan dô er der minne enpfant,/ er gedâhte sâ zehant/ der triuwen unde der êren/
und wolte danne kêren.

トリスタンはそのときミネを感じた。すぐさま彼は忠誠と名誉のことを思ったのだ。そして引き返そうと思った。

それに対して、イゾルデ姫の方は、少なくともコンウォールへ向かう船の上では、そのような名誉の欠損を恐れることはない。

もっともトリスタンも騎士としての名誉の欠損を思っただけの苦しみに増して²³⁾、以下の引用のように愛の苦しみを感している。[Tr.11769-11772]

sô muote in aber diu Minne mê ,/ diu tete im wirs danne wê:/ si tete im mê ze leide/
dan Triuwe und Êre beide;

そのように彼をより苦しめるのはミネであって、それは痛みよりも彼にひどい思いをさせた。それは彼をもっと苦しめた。誠実や名誉を重んじる心にも増して。

この箇所を見るとき、Leid (mhd. leit、痛み) とは名誉の欠損に起因するというマウラーの説は必ずしも当てはまらないようにも思う。少なくとも、マウラーの唱えるような痛みが存在するとしても、更にそのような社会的な価値観をも超越した内面的な愛による焦がれに苦しむ、ということが言えるのではないか。

ここで本論がテーマとしている、トリスタンの入浴時のイゾルデの殺意とためらいの問題について戻ってみよう。

以下の引用部分は、船の上で媚薬を飲んで二人が自分たちの愛を自覚した後に、トリスタンの入浴時の状況を二人で思い出す場面である。[Tr.11958-11969]

»â«, sprach Îsôt, »dô ez sich mir/ ze alsô guoten staten getruoc,/ daz ich iuch in dem
bade niht sluoc,/ got hêre, wie gewarp ich sô!/
daz ich nu weiz, wiste ich ez dô,
binamen sô wære ez iuwer tôt.«/»war umbe«, sprach er, »schoene Îsôt?/
waz wirret iu? waz wizzet ir?«/ »swaz ich sihe, daz tuot mir wê:/ mich mûejet himel unde sê; /lîp
unde leben daz swæret mich.«

23) トリスタン自身の騎士としての名誉についての考えは、例えば Tr.4405-4445 に明瞭に表明されている。高貴な騎士としてのたしなみは、強い自覚をもって意識的に身に着けねばならず、努力を怠れば名誉は失われる、と（少なくとも自分がマルケ王の甥であると知った時点の彼は）考えていた。

「ああ」とイゾルデは言った、「あのとき私にまたとない好機がもたらされながら、あなたをお風呂の中で切り殺さなかったなんて、主なる神よ、私は何をしていたのでしょうか。私がいま知っていることを、あのときに知っていたら、本当に、あなたは死んでいらしたでしょうに。」「なぜ？」と彼は言った、「美しいイゾルデ、何があなたを惑わせているのですか？あなたは何を知っているのです？」「私が見るもの全てが、私を苦しめるのです。空も海も。この身も生きてることすらも、私を苦しめるのです。」

ここで下線部に記されているイゾルデの言葉の内容は、「もしも自分があのときにあなたを愛していると自分で気づいていたら」ということである。そのことを踏まえるならば、トリスタンの入浴の場面では、イゾルデは自分のトリスタンに対する愛を自覚していなかったことになる。

しかし、このことは彼女がトリスタンを愛していなかったということではなくて、無意識的に愛してしまっていたのだ、という意味である。愛は外部にも見えず、それどころか彼女自身も気づくことはないのに、実際に存在していた。

彼女がトリスタンを殺さなかったのは、「甘やかな女性らしさ」[Tr. 10265] ゆえであったが、それが彼女自身も気づかなかった愛によることが、ここではっきりする。しかし、そのことにイゾルデ自身も語り手も入浴の場面の時点では気づいていなかった。船上で二人と一緒に媚薬を飲んで、自分たちの潜在化していた愛が意識上に現れて初めて自覚することができたのである。

正式な結婚以外には男女と結ばれることが許されぬ高貴な宮廷貴婦人として、男性側ではなく自らが相手に奉仕し、自分が愛を告白することは為すべき所業ではない。まして敵への愛を自覚していたら、名誉を失う苦しみ故にトリスタンを殺してしまったかもしれない。伯父モーロルトを殺したその人を愛してしまうなんて、と。その場合の名誉心は社会的でありながら非常に内面的で、彼女の心の中で独自の論理によって成立し完結するものである。

入浴の場面では、まだマルケ王との縁談は無かったので、もしトリスタンを自ら愛してしまったと自覚した故に彼を殺すとしたら、それは「不倫」で名誉を失うという外的な理由ではなく、敵であるのに心を奪われ愛してしまった、という内面的な屈辱ゆえとなるだろう。そのような内面的な「名誉」の欠損ゆえの「苦しみ」をイゾルデ姫は敢えて喜んで受け入れてしまう。男性中心の騎士社会の名誉の論理を心に内在化させて自分の性愛の願望を抑圧していたイゾルデ姫は、媚薬によって自らを解放したのである。

使用したテキスト

Gottfried von Straßburg: *Tristan und Isolde*. Bd. 1-2. Herausgegeben von Walter Haug

- und Manfred Günter Scholz, mit dem Text des Thomas, herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Walter Haug. Berlin 2011. (Deutscher Klassiker Verlag)
- Heinrich von Veldeke: *Eneasroman*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Nach dem Text von Ludvig Ettmüller. Ins Neuhochdeutsch übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Dieter Kartschocke. Stuttgart 2007. (Reclam)
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Bd.1-2. Nach der Ausgabe Karl Lachmanns. Revidiert und kommentiert von Eberhard Nellmann, übertragen von Dieter Kühn. Frankfurt am Main 2013. (Deutscher Klassiker Verlag)
- Das Nibelungenlied*. Nach der Handschrift B herausgegeben von Ursula Schulze. Ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart 2011. (Reclam)
- Das Nibelungenlied und die Klage*. Nach der Handschrift 857 der Stiftbibliothek St.Gallen.Mittelhochdeutscher Text, Übersetzung und Kommentar. Herausgegeben von Joachim Heinze. Berlin 2015. (Deutscher Klassiker Verlag)

二次文献

- Barandun, Anina: Die Tristan-Trigonometrie des Gottfried von Straßburg – Zwei Liebende und ein Dritter. Tübingen 2009.
- De Boor, Helmut: Die Grundauffassung von Gottfrieds Tristan. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 18. Halle 1940, S. 262-306.
- Maurer, Friedrich: Leid. dritte Auflage. Bern 1964, (erste Auflage 1951).
- Müller, Jan-Dirk:Höfische Kompromisse – Acht Kapitel zur höfischen Epik.Tübingen 2007.
- Schnell, Rüdiger: Gottfrieds Tristan und die Institution der Ehe. In: ZfdPh.101. 1982. S. 334-369.
- Schnell, Rüdiger: Genealogie der höfischen Liebe. Ein kulturwissenschaftlicher Entwurf in kritischer Sicht. In: ZfdPh.122. 2003. S. 101-117.
- Schulze, Ursula: Das Nibeluntenlied, Stuttgart 1997.
- Simon, Ralf: Thematisches Programm und narrative Muster im Tristan. In: ZfdPh.109. 1990. S. 354-380.
- Tetzner, Reiner: Germanische Götter-und Heldensagen. Nach den Quellen neu erzählt von Reiner Tetzner. Stuttgart 2011. (Reclam)
- Thomasek, Thomas: Gottfried von Straßburg, Stuttgart 2007.
- Weber, Gottfried/Hoffmann, Werner: Gottfried von Straßburg. 5. von W.Hoffmann

bearbeitete Auflage. Stuttgart 1981.

Wenzel, Horst: Öffentlichkeit und Heimlichkeit in Gottfrieds ‚Tristan‘. In: ZfdPh.107.
1988. S. 335-361.

あとがき

シンポジウムにおける質疑応答とその成果としてその概要を以下に記す。

質問者 1：嶋崎発表でハルトマン『哀れなハインリヒ』における豊かな生活として世俗的・人間的な利益に繋がる *êre* と、神の国に入るといった宗教的な色彩を持つ *êre* が提示された。この二種類の *êre* はシンポジウムを通して視野に入れるべきと思われる。それに関連して、松原発表の中でジグーネについて、*„diu durch die gotes minne / ir magetuom unt ir freude gab“* は「彼女は神への愛のために乙女と喜びを差し出し」と訳されている。これはジグーネと会った直後にパルチヴァールがトレフリツェントの庵に行き、「神の愛」に自分を委ねなさいと諭される直前の場面で、*„gotes minne“* が「神への愛」か「神からの愛」かによって読み方が変わる。次に伊藤発表に関して、盛期ミンネザングにおいては前提として愛の成就是除外されている。女性の獲得が男性の *êre* になるということを明示しているテキストがあるのか。また、渡邊発表に関して、『トリスタン』において王妃であるイゾルデが不倫をしていたとすればマルケ王の宮廷全体の *êre* の問題になるので、イゾルデが *êre* の失墜を恐れてブランゲーネを殺そうとするのは理解できる。しかし一方、マルケ王の宮廷社会は非常に腐敗したものとしてゴットフリートによって描かれており、トリスタンとイゾルデの *minne* は肯定的に捉えることもできる。*êre* を担うべき宮廷が腐っていたら、*êre* がどうなるか。

松原：ジグーネの「神への愛」という訳については、パルチヴァールとジグーネの対比が念頭にある。パルチヴァールは絶望していて神を信じず、トレフリツェントに諭されて次の冒険に出ていくが、教えを受けた後も自分の目標は妻であるコンドヴィーラームールスと聖杯であると言いき、神には戻らず、最終的にはアンフォルタスに対して寄り添う心を持つことができず神から手を差し伸べられる。一方ジグーネは、トレフリツェントの女性版として、神から愛されているというよりジグーネが神へ *minne* を捧げ、そういう信仰を持って夫への純潔を守るために隠者のように世から離れた生活を送っている。そういう作者の対比する意図を考慮して「神への愛」と訳した。

質問者 1：パルチヴァールはトレフリツェントの庵を出る際に騎士として生きていくよう言われて冒険を続けてコンドヴィーラームールスを求めるが、ジグーネは自分の乙女と喜びを神の愛に委ねることによって神のもとに至る。

伊藤：男性が女性を獲得することが名誉となることを明示するリートを思いつかないが、間接的には、Reinmar der Alte は女性と結ばれる道は立派な道だと書いており、Der von Kürenberg は女性を手なずけることは鷹を飼い慣らすかのように簡単で、女性を獲得することで胸が躍るということを書いており、男らしさを称賛している。Walther 以降のNeidhart von Reuenthal では、女性が能動的に男性に向かうというリートがあり、歌やダンスがうまいことで女性を得るといったことは名誉に近いと考えられる。

質問者 1：相手に恋の歌を歌って自分の恋の苦しみを捧げること自体が男性の *êre* ではないか。Der arme Heinrich で徳目を挙げる中で、恋の歌をうまく歌うことがハインリヒの社会的 *êre* に繋がる箇所があり、愛が成就することが *êre* になるのか疑問である。

渡邊：腐敗した社会に対するアンチテーゼとしてトリスタンとイゾルデの愛が提示されているという点について。トリスタンは神が命ずるままにピュアに戦い、傷つき、イゾルデに出会う。その神がいつの間にか *minne* の神に置き換わっているのではないか。トリスタンとイゾルデの愛も、二人にしてみれば宗教的なまでにピュアである。世俗的な世界はその「宗教的」なピュアな愛に比してみれば、常に腐敗しているだろう。実際マルケ王の宮廷は非常に嫉妬深く、トリスタンを危険な目に遭わせる。嫉妬はキリスト教世界では不徳であるが、そういう感情から離れた二人のピュアな愛の生き方は信仰に近い。彼らにとり愛は神と同列である。ただそれがキリスト教的か、あるいはビーナス的かは微妙である。世俗的な男女の繋がりには婚姻で、教会が介在するが、トリスタンとイゾルデの愛は教会を介さない。宮廷から追い出され、名誉を失い、二人は不安を抱くが、不倫だから悪と感じるわけではない。

質問者 1：『トリスタン』において神明裁判で神がイゾルデの言葉を認めており、またゴットフリートの出自から考えると、神はキリスト教の神のことだと思う。*êre* の基盤を成している宮廷自体が健全であれば、*êre* も十全に認めうるものではあるが、基盤となる宮廷が十全に機能しない場合、そこに対立する *minne* がどうなるのかという疑問がある。

渡邊：たしかに、ゴットフリートは聖職者の教育を受けたが、また革新的な神学者アベラールの影響を受けていたとも言われる。教え子エロイズとの禁断の愛に堕ちた人物である。ゴットフリートが聖職者的な視点で、愛を宗教的な存在として描いているのも、うなずける。

質問者 2：中世文学の作者がほとんど全員男性であり、女性の *êre* も男性が語ったものであり、Frauenlieder でも、男性の栄誉を女性に仮託している。当時、女性が書いた手記にどう書かれているか、あるいは歴史学者はこの問題をどういうふうに捉えているのか。また、恋愛的名誉とそうでない名誉はどう違うのか。また、13 世紀の後半ドイツ文学史上初のユダヤ詩人 Süßkind von Trimberg が、誠実、礼節、鷹揚、勇気、節度の五つを混ぜると名誉という良薬ができると言っているが、*êre* はどういう概念の変遷を経て世俗化されていくのか。

渡邊：Hildegart von Bingen あたりをまず押さえなければいけないと思うが、ラテン語ではあるがアベラールとエロイズの手紙には 12 世紀の女性の生の声が現れている。中高ドイツ語の抒情詩、叙事詩で女性が書いたものについては分からない。

伊藤：Minnesang との関連では、無名の詩「*dû bist mîn, ich bin dîn. des solt dû gewis sîn. dû bist beslozen in mînem herzen. verlorn ist daz sluzzelîn. dû muost ouch immer drinne sîn.* あなたは私のもの、私はあなたのもの」は女性が書いたのではないと言われる。聖職者の官能的な書簡に関連付けられものである。Minnesang で女性も男性を慕っていたということは語り手である男性の願望であり、男性の視点が反映されている。ただし願望

であるにもかかわらず成就されない苦痛をあえて選ぶというところに Minnesang の特異な点がある。

嶋崎：シンポジウムの前提として男が婦人の名誉を規定しているという考えがあった。貞節も男が求めているものであり、不倫の愛において女の人が愛を貫くことが名誉となるとしても、それも男の願望である。女の人にとって何が本当の名誉かは別の問題である。

渡邊：フランス 12 世紀の中葉、アリエノール・ダキテーヌというパトロンが文芸を自分の宮廷で保護した。テューリングゲン方伯ヘルマンの妻エリーザベトのような女性のパトロンを考えれば、庇護者と受容者のどちらも女性であるので、女性の好みは文学に反映される可能性はある。日本には女流歌人が平安期にたくさんいるが、ドイツの中世においては非常に稀である。質の高い世俗的な文学作品ができたのは 12 世紀後半以降であり、教養の主体である知識層の中心はラテン語を用いる聖職者であって、女性の文人が入り込んでいなかった。

質問者 2：日本語では平仮名を使って女性が書き始めたという言語状況の違いがある。ヨーロッパで女性が語り始めるのは神秘思想であり、100 年ぐらい後の中世末期であった。

渡邊：知識層である聖職者は女性を誘惑的で非常に危険だと考えた。12 世紀後半にマリア信仰がだんだん出てくるが、それより前に女性に対する高貴なイメージはなかった。ようやく 12 世紀後半ぐらいに結婚がキリスト教の教会で秘蹟と認められた。『トリスタン』は「婚姻」対「不倫」というような対立項で述べられるが、そもそも結婚自体が必ずしも賞賛されていなかった。この時期に必要な悪として制度化された結婚は、教会の管理下に置かれていた。さて、世俗の *ère* の概念がどう変化したかという先ほどのご質問の方に戻るが、1180 年から 1210 年ぐらいまでの文学は一つの概念が文脈に応じて多様に捉えることができた。誠実や礼節や節度や鷹揚など概念の具体化・分化は中世後期以降で、神学的には 1220 年代、30 年代ぐらいにアラビアからアリストテレスの「ニコマコス倫理学」がヨーロッパに入ってきてからだと思われる。

質問者 2：中庸とか節度が名誉に繋がるのであり、五つの分類は平等でない。

渡邊：多義的であった概念が即物的に階層的に分類され、「名誉」についても更に下位分類（=具体的範疇分け）されたのだろう。この意味づけの階層化はアリストテレス的である。

嶋崎：その後の 1350 年から 1650 年の初期新高ドイツ語の時代の文学では *ère* が問題にならない。こういう生き方をしてはいけないという話はいっぱいあるが、これを理念として高く持つべきだという話はない。*ère* が再び文学の問題になるのは近代以降であろう。

松原：宮廷叙事詩について言えば、ガーヴァーンが *minne* を大切に思って冒険を繰り返すのに対し、パルチヴァールは一人の妻と聖杯だけを思って他の女性への *minne* 奉仕は一切行わないことが作中でも強調され、ガーヴァーンはパルチヴァールが何を大切に考えているかというその言葉を引用したりする。女性はパロディー的なアンチコニーエを除いて自分の *ère* について語らないが、男性がどう考えているかということについては登場人物や語り手が色々な見方を示している。一方、ヴォルフラムの信奉者達が残した『王冠』や『ヴィガロイス』といった作品では、東の国へ冒険に行き、面白いものを見て、異教徒

との闘いで悲惨な目に会って戻ってきて、また冒険を繰り返す。そのような作品は、パルチヴァールやガーヴァーンが行った冒険に比べて文学史において二番煎じとして低く評価され（最近では再評価されているが）、ひたすら東の国を目指すとか、苦境に陥っている姫を助けるというような冒険の細かい事象に面白さがあるが、*ère* や徳目について系統的に論じる箇所はなくなっていく。

嶋崎：恋愛とそれ以外の区別ということについて言えば、そこで問題になるのは文学上の恋愛における名誉であり、現実の恋愛ではないという区別は重要だと思う。

質問者 3：今回扱われた名誉は男女の関係性での名誉であり、その女性は男性によって規範を逸脱しない、男性から見て理想的な女性として描かれる。一方『ニーベルンゲンの歌』では二人の女性が名誉をかけて激しく口論する。特にクリエムヒルトは、19 世紀以降から見ても規範から逸脱している。男性の歌人たちが理想として描く女性像とは真逆である。

渡邊：クリエムヒルトとプリュンヒルトの口論は二人の間の名誉をかけた戦いであり、作品の本質に関わる。そこにはクリエムヒルトの高慢さが読み取れると言われる。高慢さは非常に肉欲的なもの、情動的なものであり、キリスト教から見れば罪である。クリエムヒルトは非常に苦しい思いをして復讐をするが、彼女に批判が生じるのは高慢さのためである。ヨーロッパの文学の中で彼女は初めて自分の意思で行動した女性であり、それ故に中世の価値観で言えば罪深いと評する研究者もいる。*ère* は節度を土台にしており、当時の倫理的な議論から見れば、それに対立する人間的な情動は罪深い。しかしそれを描いてこそ文学として成り立つ。

嶋崎：プリュンヒルトの名誉は身分についてのものであるが、クリエムヒルトの名誉はジーフリトを愛しているという表明である。二人が争う名誉の意味が異なる。クリエムヒルトがそういう独自の名誉のために常軌を逸することを文学で描くことには意味がある。

質問者 4：女性の栄誉が受動的であるということが話の前提であったが、『イーヴァイン』の中で遺産を争う闘いで騎士を立てて戦うのは受動的ではあるが、能動的に騎士を使って男性の名誉と同じものを女性は得たのではないか。またミネザングに関して、自分の奉仕を受けないのであれば、もう奉仕しないという Walther の拒絶の歌はどう理解したらいいのか。

松原：『パルチヴァール』にも『イーヴァイン』と同じように、オビロートという男性を利用する少女が出てくる。ガーヴァーンの助けを得て、城が包囲されている状況を打破して、城の外と中の者が結ばれるが、子供が騎士を雇うという、アンチコニーエと同様、宮廷のしきたりからはずれたところで楽しませるものである。女性が自分の身につけているものを男性に託し、盾に覆って、それを傷だらけにして戦ってもらおうということで、城の主は男性で、女性はそこに付随してはいるが、優雅さを付け加え、フランスから輸入された文化を楽しむために、女性の *minne* を絡めたり、袖を盾にかけたりして、宮廷文学の型としてそういう行為自体が楽しまれた。どのくらい女性が能動であったかを読み取るのは難しい。

渡邊：『ニーベルゲンの歌』でプリュンヒルトが被った侮辱に対しハゲネが仕返しをするが、プリュンヒルトが積極的にハゲネを唆したわけではない。一方、クリエムヒルトはエツツェル王やフン族の人々を唆して死闘に迫りやる。そこにクリエムヒルトの悪魔性が指摘される。

伊藤：Walther の minne を拒絶する歌については、他にも minne 奉仕を諦めることを述べているものがある。Friedrich von Hausen は、やめたくなるほどつらい自分の苦しみを打ち明けるが、典型的なレトリックである。Walther はギブ・アンド・テイクを強調する歌人であり、L48,12 の第 5 節で、自分はお礼をしてくれる女性に向かう、傲慢な女性たちから何が得られるのかと言う。Walther は歌人が褒め称えているのだから女性もそれに報いるべきだということを強調し、それができないのであれば拒絶すると言う。Walther は対等関係、場合によっては歌人の方が立場が上であるということをアピールするが、そこには一種の女性に対する脅し文句のような側面がある。

日本独文学会研究叢書 156号

2024年10月19日発行

© 2024 一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Nr. 156

Alle Rechte vorbehalten

©2024 Japanische Gesellschaft für Germanistik e.V. Tokyo

中世文学における婦人の名誉

編集 嶋崎 啓

発行 一般社団法人日本独文学会

〒170-0005

東京都豊島区南大塚 3-34-6-603

電話 03-5950-1147

メールアドレス <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

SrJGG

ISBN 978-4-908452-46-8